

多賀城市文化財調査報告書 第22集

山王遺跡

—第8次発掘調査報告書—

平成2年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

序

多賀城市内における埋蔵文化財の緊急調査は、民間による宅地開発あるいは公共事業等の原因により年々その数を増してきております。特に山王遺跡は市街化への動きが著しい地域でもあります。

さて、この度の発掘調査は宅地造成に先だって実施してまいりましたが、工事関係者のご協力により無事終了の運びとなりました。本書はその成果をまとめたものです。

調査の結果、古墳時代の壙、古代の道路跡、掘立柱建物跡、井戸跡等の遺構が発見されました。これらの発見は、多賀城周辺の状況を解明する上で大変重要な資料であり、かつ東北の古代史解明の一端に寄与するものと思われます。

本報告書が多くの方々に活用され、文化財保護の一助となることを願うものであります。

最後に、本遺跡の調査、整理、報告書作成までの間、多くの方々からの協力や助言、指導を得ましたことに心から感謝申し上げる次第であります。

平成2年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

所長 斎藤一司

例 言

- 本書は、共同住宅建設に先立って行った山王遺跡の発掘調査報告書（第8次調査）である。
- 本書の執筆・編集は、当センター職員の協力を得て、相沢清利が担当した。
- 本書中における各遺構の略号は次の通りである。
S B—掘立柱建物跡、S D—溝跡、S K—土坑、S P—柱穴、S X—その他
- 本書持図中の水系レベルは、標高値を示す。
- 調査区の実測基準線は、国家座標の方位をとっている。
- 本報告書中の土色は、「新版標準土色帖」(小山・佐原 1976)を使用した。
- 発掘調査及び報告書作成にあたり、東北歴史資料館・宮城県多賀城跡調査研究所の諸氏、斎野裕彦氏(仙台市教育委員会)、広瀬和雄氏(大阪府教育委員会)、山崎純男氏(福岡市教育委員会)、星川清親氏(東北大学農学部)、渡辺泰伸氏(仙台育英学園高等学校)に御教示、御協力を得た。
- 本遺跡出土の鍍金の分析は川鍍テクノリサーチ株式会社総合検査・分析センター千葉事業所に、杭の樹種同定については鳴意己三郎氏にそれぞれ依頼した。
- 調査・整理に関する諸記録及び出土遺物は多賀城市埋蔵文化財調査センターで一括保存しているので活用されたい。

調 査 要 項

- 遺跡所在地：宮城県多賀城市山王字東町浦47地
- 調査期間：昭和63年11月14日～平成1年2月4日（西区）
平成1年4月7日～7月29日（東区）
- 調査面積：2,750m²
- 調査主体者：多賀城市教育委員会 教育長 横井 茂男
- 調査担当者：多賀城市埋蔵文化財調査センター
所長 斎藤 一司 主任研究員 高倉 敏明
研究員 滝口 卓 石川 俊英 技師 千葉 孝弥 石本 敬 相沢 清利
嘱託 鈴木 久夫 滝川ちかこ
- 調査協力者：太和團地株式会社 丸信建設株式会社
- 発掘調査参加者：菊池 豊 相沢まさ子 赤間かつ子 両部美智子 小野 玉乃 菅野 恵子
後藤はつみ 来永たみ子 菅原 純代 鈴木 一郎 武田 りき 千葉 享一 大場 正司 小野寺恵子
加藤 文一 菅野 文夫 木村 梅子 佐々木忠志 掘越のぶ子 松浦 正 水越 良子 後藤みよ子
渡辺 幹子 加藤 昭一 平山 節子
- 遺物整理参加者：菊池 豊 佐藤 悅子 斎藤 珠江 山田 紀子 柏倉 雪代 須藤美智子
黒田 肇子 熊谷 純子 沢田 敦

本文目次

序文	
例言・調査要項	
I 調査に至る経緯	2
II 調査方法と立地と環境	2
III 調査方法と経過	2
IV 調査成果	8
1. 古墳時代の遺構と遺物	8
2. 古代の遺構と遺物	14
(1) 遺物包倉層とその出土遺物	14
(2) 道路跡・側構跡	14
(4) 掘立柱建物跡	23
(4) 井戸跡	28
(5) 溝跡	34
(6) 土城	37
3. 石製品	39
4. 繩文・弥生土器	41
5. 中世以降の遺構と遺物	41
V まとめ	45
付編1 山王遺跡出土杭他の樹種同定	51
付編2 山王遺跡出土鉄滓の分析	55

挿図・挿表・写真図版目次

第1図 多賀城市遺跡分布図	1	第30図 繩文・弥生土器	42
第2図 調査区位置図	3	第31図 中世以降の土塙出土遺物実測図	43
第3図 第3・4・8次調査遺構配置図	6		
第4図 建築材実測図	9	第1表 山王遺跡調査一覧表	5
第5図 古墳時代木組み遺構平面図断面図	10	第2表 古墳時代土器観察表	47
第6図 古墳時代木組み遺構立杭配置図	11	第3表 道路側溝跡A期出土遺物観察表	47
第7図 第II層出土遺物実測図	12	第4表 道路側溝跡C・D期出土遺物観察表	47
第8図 木組み遺構出土杭実測図	13	第5表 井戸跡出土遺物観察表	49
第9図 遺構全体図	15	第6表 溝・土塙出土遺物観察表	49
第10図 遺物包含層・道路側溝跡A期出土遺物	17	第7表 中世以降の遺構と遺物の概要	50
第11図 道路側溝跡・整地層・セクション図	18		
第12図 道路側溝跡C・D期出土遺物(土師器杯)	21	写真1 西区S X 382道路全景・東区全景空中写真	63
第13図 道路側溝跡C・D期出土遺物(土師器杯・須恵器・縄釉陶器)	22	写真2 東区S X 468南北道路跡・S B 388～391掘立柱建物跡	64
第14図 道路側溝跡C・D期出土遺物(赤焼き土器)	24	写真3 S X 469古墳時代木組み遺構	65
第15図 道路側溝跡C・D期道路上面出土遺物	25	写真4 S X 469ヨシの茎横出状況	66
第16図 S B 388・389実測図	26	写真5 S E 392A・B井戸跡	67
第17図 S B 390A・B実測図	27	写真6 S E 393～395井戸跡	68
第18図 S E 392A・B井戸跡実測図	29	写真7 土塙・溝跡全景	69
第19図 S E 393・394井戸跡実測図	30	写真8 土塙・溝跡全景	70
第20図 S E 392A・B井戸跡出土遺物実測図	31	写真9 古墳時代の遺物(土師器・石製模造品)	71
第21図 S E 395A・B井戸跡実測図	32	写真10 道路側溝跡出土遺物(土師器・須恵器)	72
第22図 井戸跡出土曲物実測図	33	写真11 道路側溝跡出土遺物(赤焼き土器)	73
第23図 S E 393・394井戸跡出土遺物実測図	34	写真12 S E 392～395井戸跡出土遺物	74
第24図 溝跡セクション図	35	写真13 木製品他	75
第25図 溝跡出土遺物	36	写真14 繩文・弥生土器	76
第26図 土塙実測図	38	写真15 磁石・使用痕・加工痕のある砾	77
第27図 石製模造品実測図	39		
第28図 石製品実測図(砥石・使用痕加工痕のある砾)	40		
第29図 石器(ラウンドスクレイバー)実測図	41		

I 調査に至る経緯

本調査については、昭和62年9月に当該地を対象とした宅地造成工事が大和団地株式会社より提示されたため、本件開発計画について検討を行った。当該地は山王遺跡の包蔵地内に位置し、さらに西側に隣接する第4次調査でも道路跡・井戸跡等が検出されており、古代の遺構が存在する可能性が十分に考えられた。そこで、申請者と調査日程等の協議を行い、住宅建設予定地の発掘調査について同意が得られたので、本調査を実施したものである。

II 山王遺跡の立地と環境

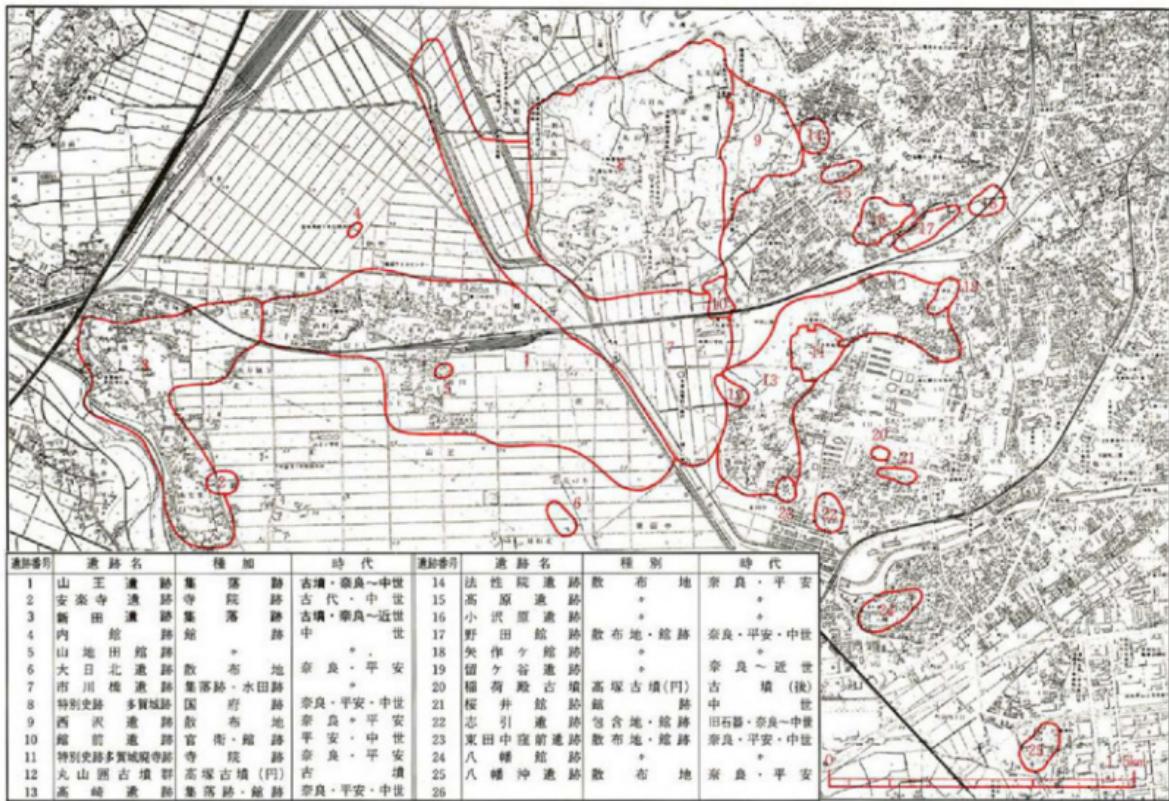
山王遺跡は、多賀城市山王、南宮の両地区を中心とする東西約2km、南北約1kmの広範囲にわたる遺跡である。本調査地点は旧七北田川と砂押川によって形成された東西に長い自然堤防上に立地しており、海拔約5mを計る。この周辺の地質については、泥炭・有機質粘土～シルトと砂層の互層から形成される沖積層である。

周辺の遺跡についてみると、本調査地点の北東約1.5kmの丘陵上に特別史跡多賀城跡が所在している。さらに、この南面地域には市川橋遺跡が所在しており、山王、新田、高崎遺跡とともに、古代多賀城を取り巻く大規模な集落群を構成している。

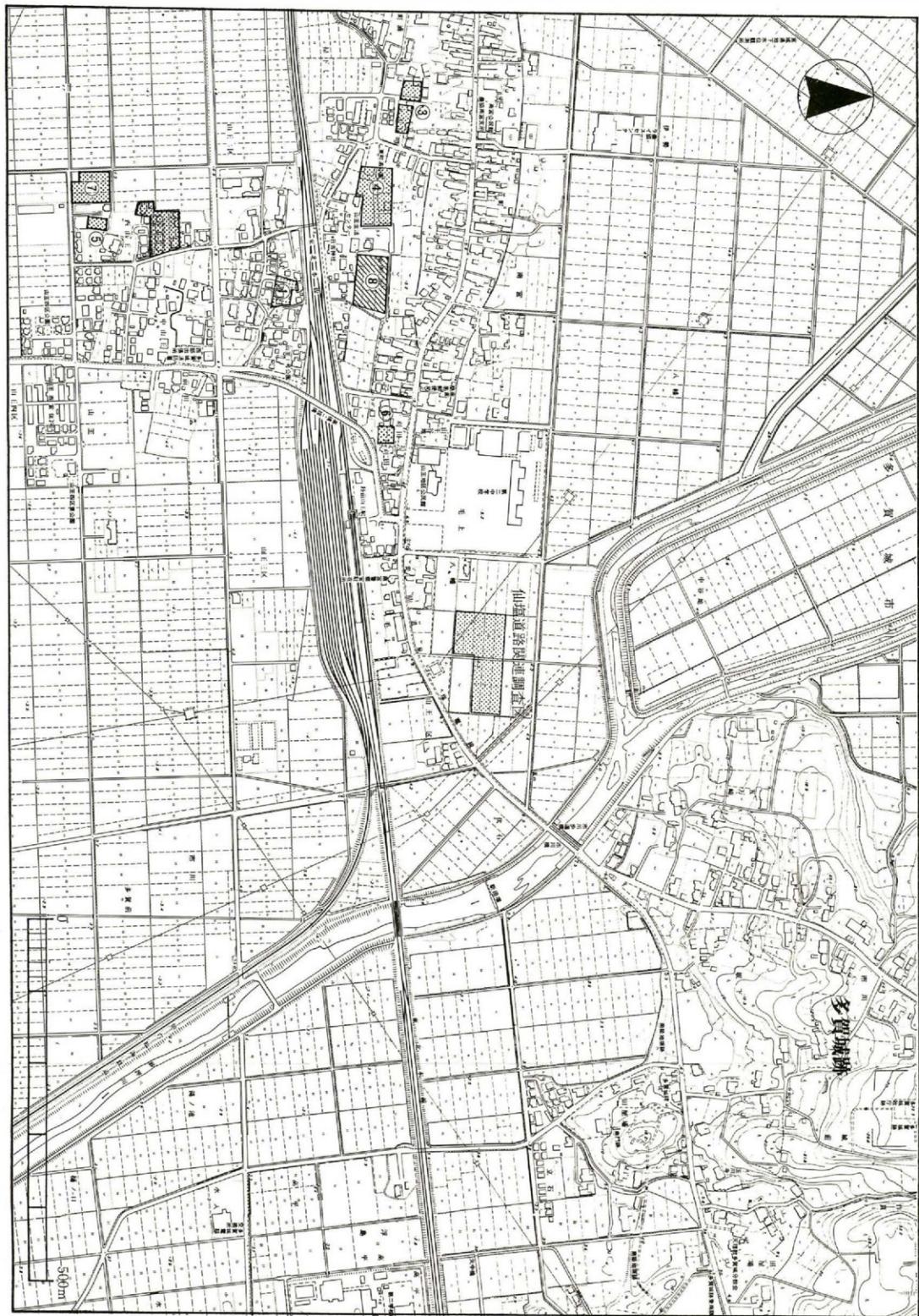
本遺跡における過去の調査では、古墳時代～近世までの遺構・遺物が多数検出されている(第1表)。特に古墳時代と奈良・平安時代に注目すべき成果が得られている。古墳時代(中期)に属するものとしては、東町浦、西町浦地区より方形を区画する溝跡、土塁、竪穴住居跡等を発見している。遺物には土器類の他に、臼玉、ガラス玉、コハク玉の玉類や、石製模造品(鏡、剣形)および製作に係る砥石、原石、剣片、未製品などが出土している。また、奈良・平安時代に属するものとしては、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、道路跡、土塁を発見している。遺物には瓦、施釉陶器、墨書き土器、円面鏡、石帶などが普遍的に出土している。これらの遺構・遺物などから近年多賀城との関連性が強い地域として認識されるようになってきている。

III 調査方法と経過

今回の発掘調査は調査日程、排土捨場の関係から前期と後期に分けて調査を実施した。前期分は西区(1,060m²)を対象とした調査は昭和63年11月7日より重機による表土剥ぎを開始し、同9日には終了した。またこれと並行して排水溝を兼ねた土層観察用トレンチ(幅50cm、深さ60cm)を周囲に巡らせた。引き続きⅡ層上面での遺構検出作業を調査区北側より行い中世以降と思われる土塁等を検出する。調査区南半では東西方向に延びる溝跡が2条平行していることが確認され、第4次調査で判明していたS X 200道路跡が延びてきているものと推察され



第1図 多賀城市遺跡分布図



第2図 調査区位置図

た（11月6日）。以後、古代の井戸跡2基を追加検出し、隨時掘り込みを行う。道路跡の調査については、第4次調査での検討により3～4時期の変遷が把握されており、これの検証を目的の一つとした。平面プランの状況、断面観察によりA～D期の4期の変遷が認められ、規模、時期変遷とも第4次調査の見解と基本的には一致をみた。11月29日頃には実測図作成のため通り方を設定する。通り方の基準点は国家座標のX:-189.027、Y:+12.690の地点を原点とした。さらに、3m単位で原点より北側を順にN-01、N-02…、東側をE-01、E-02…と表した。また、これと同様に調査区全域に3m方眼のグリッドを設定し、南北方向をアルファベット(A～R)。東西方向をアラビア数字(0～29)で表した。この間、古墳時代の遺物が古代の遺構検出面となっている第II層にめり込んで入っていることがわかり、調査区北東隅に任意にトレーンチを設定し下層の調査を古代の調査と平行して実施する。この結果、約1m掘り下げたところで杭列と横木等を検出する。しかし驚いたトレーンチ調査だったこともあり、本格的な調査は次年度の後期分で実施することにした。

地区番号	年次・地区	調査期間	面積	遺構	遺物
①	第1次 (中山王)	54.12.17 55. 3.22	1,500m ²	掘立柱建物跡 小柱穴、溝跡、 土塁	土師器、須恵器、瓦、灰釉陶器、 鍛錬室、土錘、鉄錘、刀子、石器
②	第2次 (山王二区)	54.12.20 55. 1.28	1,000m ²	掘立柱建物跡 豎穴住居跡	土師器、須恵器、瓦
③	第3次 (西町浦)	55. 6. 5 11.30	1,000m ²	掘立柱建物跡 豎穴住居跡 井戸跡、溝跡、 小柱穴	土師器、須恵器、赤焼、土器、 灰釉陶器、綠釉陶器、砾石
④	第4次 (東町浦)	58.10. 3 59. 3.17	2,300m ²	掘立柱建物跡 井戸跡、溝跡、 土塁、道路跡	土師器、須恵器、赤焼き土器、 灰釉陶器、瓦
⑤	第5次 (山王二区)	60. 5.27 7. 5	400m ²	柱列跡、溝跡、 井戸跡	土師器、須恵器、赤焼き土器、 灰釉陶器、木製品(曲物容器、 盤、斎串、箸状製品、串状製品)
⑥	第6次 (千刈田)	60.11.25 61. 2.14	378m ²	掘立柱建物跡 豎穴住居跡、 井戸跡、溝跡、 小柱穴、土塁	土師器、須恵器、赤焼き土器、 土製カマド、円盤状土製品、瓦、 砾石、二面鏡、円面鏡、灰釉陶器、 木製品(曲物容器、折敷、盤)
⑦	第7次 (山王二区)	63. 5.24 ～ 7.26	770m ²	溝跡、土塁	土師器、須恵器、赤焼き土器
⑧	第8次 (東町浦)	63.11.14 1. 2. 4 1. 4. 7 ～ 7.29	2,750m ²	道路跡、掘立柱建物跡、溝跡、 井戸跡、土塁	土師器、須恵器、赤焼き土器、 灰釉陶器、綠釉陶器、青磁、白磁、 瓦、硯、土製カマド、木製品(斎串、 曲物容器、漆器)、植物遺体

第1表 山王遺跡調査一覧表

このようにして前期分の造構の掘り込み・写真撮影・実測図作成をすべて終了したのは平成1年2月4日である。この後、2月13日～3月3日まで現地事務所にて造物水洗い、ネーミング等の遺物整理を行う。

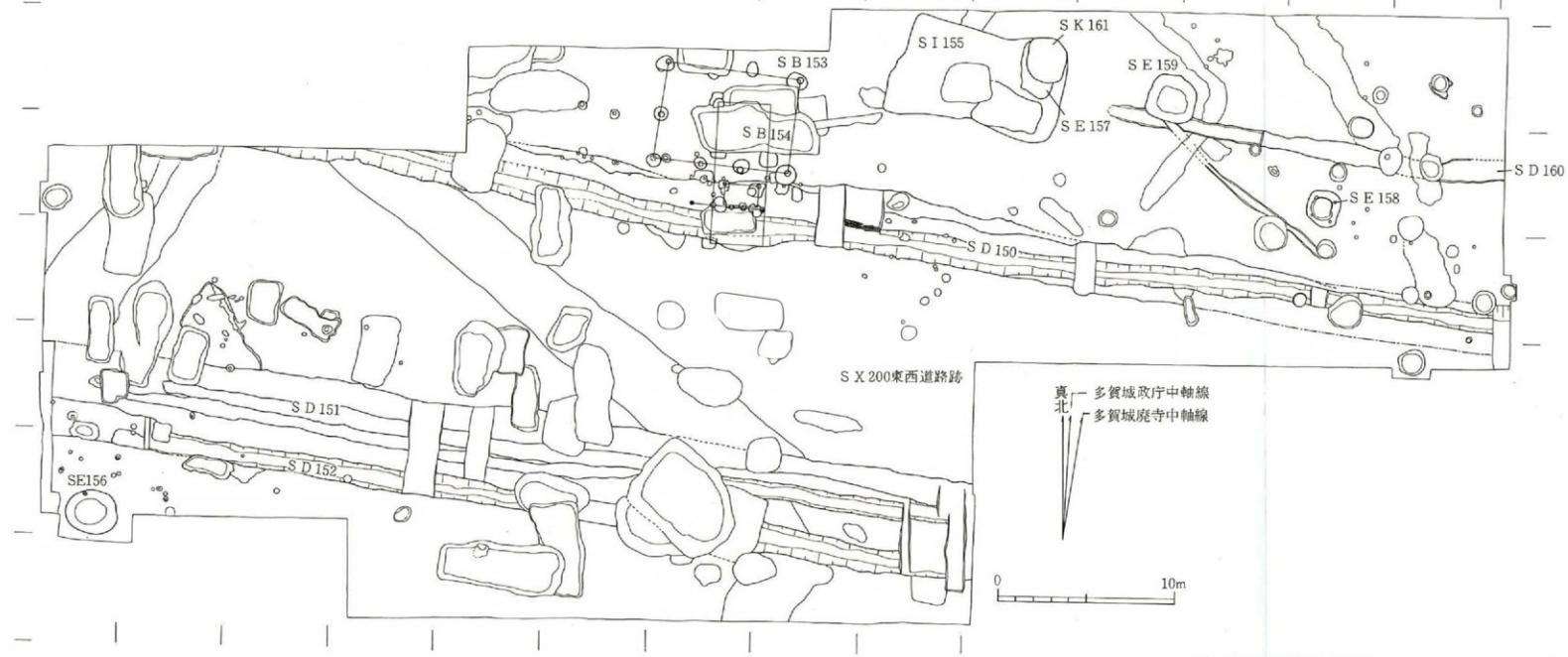
後期分、東区（1.620m²）の調査は4月7日より開始した。表土掘削による土は西区調査区を埋め戻しに使用する。造構の構成は4月28日頃までには概略がつかめるようになる。まず、中世以降と思われる土塙がさらに延びてきており、これらの調査を先行する。古代の造構については、S X 382 東西道路跡に接続する S X 468 南北道路跡が発見され、さらにその東側には井戸跡、掘立柱建物跡が分布することが知られた。また、西区でも検出していたが道路南側側溝跡の南に隣接し平行して走る溝跡も発見した。古墳時代の調査については、前期分のトレンチを拡張した調査区（17m×14m）を設定した。杭列は弧状に巡り、それに横木と斜材が複雑に組み合わされた形態をとっていることが判明した。この時点の見解としては集落を囲む施設の一部としてとらえていた。このようにして古代と古墳時代の調査は同時並行の形で進めていった。6月下旬頃には古代の道路跡に先行する包含層や溝跡を検出し掘り込みを開始する。古代の造構については7月中旬には調査をほぼ終了する。調査の一般公開は7月22日に行う。古墳時代の木材は樹種同定資料に使用するために一部採取する。補足調査を行はずしての調査を終了したのは7月29日である。

IV 調査成果

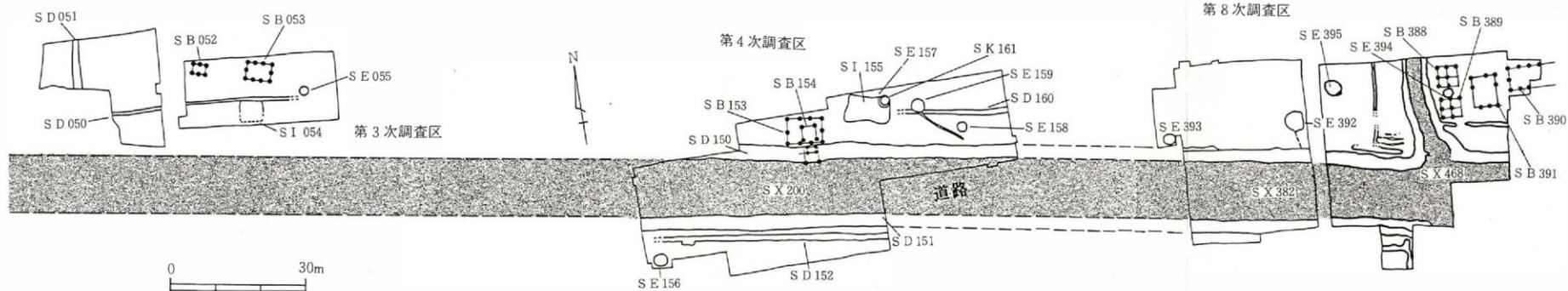
1. 古墳時代の造構と遺物

古墳時代の造構は古代の造構検出面となっている第Ⅰ層を約1m掘り下げたところで検出した。第Ⅱ層中には縄文・弥生・古墳時代前・中期(塩釜・南小泉式期)の土器が含まれており、古墳時代中期頃にはⅡ層の堆積が終了していたと考えられる。Ⅱ層は基本的に粗砂層で形成されており、有機質土はまったく含まない。堆積のあり方は調査区の広さの関係もあり十分に把握できなかったが、レンズ状に砂層が堆積し、それが幾度となくくり返された様子が観察された。

造構の構造は、横木・立杭・斜材から構成される木組み造構とでも呼ぶべきものである。調査区中央に位置し西向きの弧状を描く方位をとる。全長約18m、幅約6mの規模であるが、立杭の列方向よりみると、A～F列とG～J列の二者が認められる。立杭は約1mの幅をもってほぼ垂直に打ち込まれており、先端部を加工しただけの長さ約0.5～1mの丸杭を使用している。杭の長さはA～D列のものが短かく、E～J列が比較的長く、深く打ち込まれていた。打ち込みの間隔はA列が幅約1mと比較的等間隔であるが、他はばらつきがある。横木は約6～7mを計る樹皮の残る丸木を使用し、中には建築材を転用したもの（第4図1）も1例ある。いずれの横木も杭列に沿って検出されているが、調査区中央付近ではその分布は希薄で、長さ3m、径0.7mを計る流木が横たわっている。この木組み造構の構築方法については、まず立杭を打ち込み、これによって横木を固定する。そしてこの横木間にヨシの茎（註1）を敷き、さらに斜材（枝木）を横木に直交して立て掛けるようにして並べている。ヨシの茎は整然と敷



第4次調査遺構全体図



第3図 第4次調査遺構全体図(上)・第3・4・8次調査遺構配置略図(下)

きつめられており、交互に重ねた丁寧な作りの部分も認められる。また、斜材（枝木）の中には径10cm程の丸木杭を打ち込み合掌型をとるようなものもある。横木補強の役割を持つものであろうか。このような形態が連続して一体となっているわけであるが、実際はかなり複雑なものとなっている。

古墳時代の遺物には、土師器、須恵器杯、石製模造品、枕等がある。土師器の器種には高杯・器台・杯・壺・甕がある。

高杯は、杯部外面と体部の境がくびれて段をもち、体部は外反しながら立ち上がるるものである（第7図1）。山王遺跡3号遺構分類（註2）の高杯第Ⅲ類に類似する。

杯は、図示できたものが4点ある。平底と丸底のものがある。平底のものは体部が丸味を持って立ち上がり口縁部がほぼ直立するものである（第7図5）。同上分類杯Ⅱ類に類似する。丸底のものには体部が丸味を持って立ち上がり、口縁部で外反するもの（第7図4・8）体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部で若干外傾するもの（第7図7）、口縁部が直立気味に内湾するもの（第7図6）がある。第6図4は同上分類杯Ⅳa類に類似する。

壺は大型と小型とがある。大型のものは、2点あるがいずれも口縁

へ頸部にかけての破片である。第7図9は有段口縁のもので内外面とも丁寧にヘラミガキが施される。第7図10は複合口縁を有するもので

口唇端部に刻み目が連続して施される。小型のものは2点ある。第7

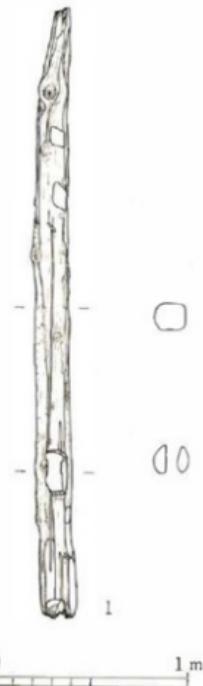
図11は口縁部が体部に較べて長いもので、最大径が口縁部にある。体 第4図 建築材実測図

部は算盤玉型を呈すると思われる。12は体部が球形を呈し、底部は平底である。

須恵器杯は丸底を呈し、体部は半球形に丸味をもって立ち上がり、口縁部で内傾気味におさまる（第7図14）。

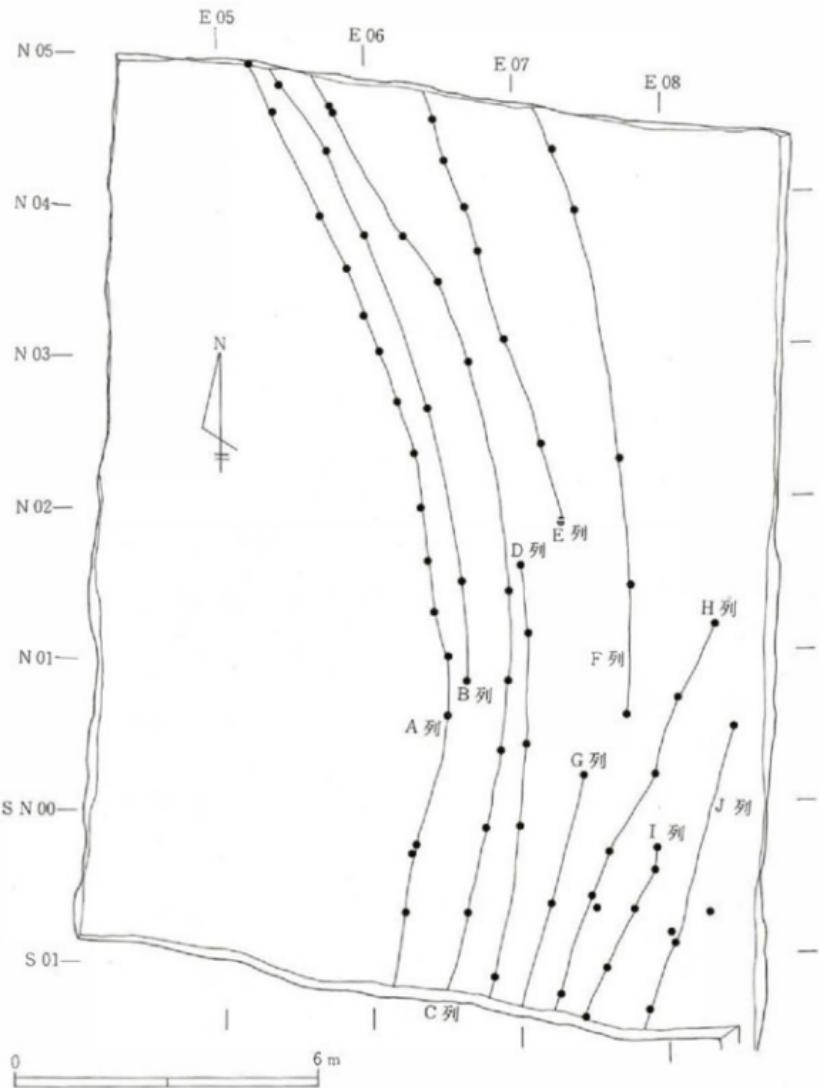
ここで土師器・須恵器の編年的位置について若干まとめておく。土師器高杯・杯はその特徴により山王遺跡第2次調査出土土器に類例を見いだすことができ、年代的にもほぼ同じ頃（南小泉式期）に比定することができる。器台・壺については、塙釜式に比定することができるが、藏王町大橋遺跡の段階まではさかのばらないであろう。須恵器杯はロクロを使用しておらず、形態、器面調整とも土師器制作の技法を用いている。

第4図1は横木に使用していた建築材である。長さ3.22m、幅16~19cmを計る。丸木材を利用し、四面は面取りされているが加工痕は明瞭でない。臍穴は一端から約60cmのところに10×20cmの大きさで穿れている。

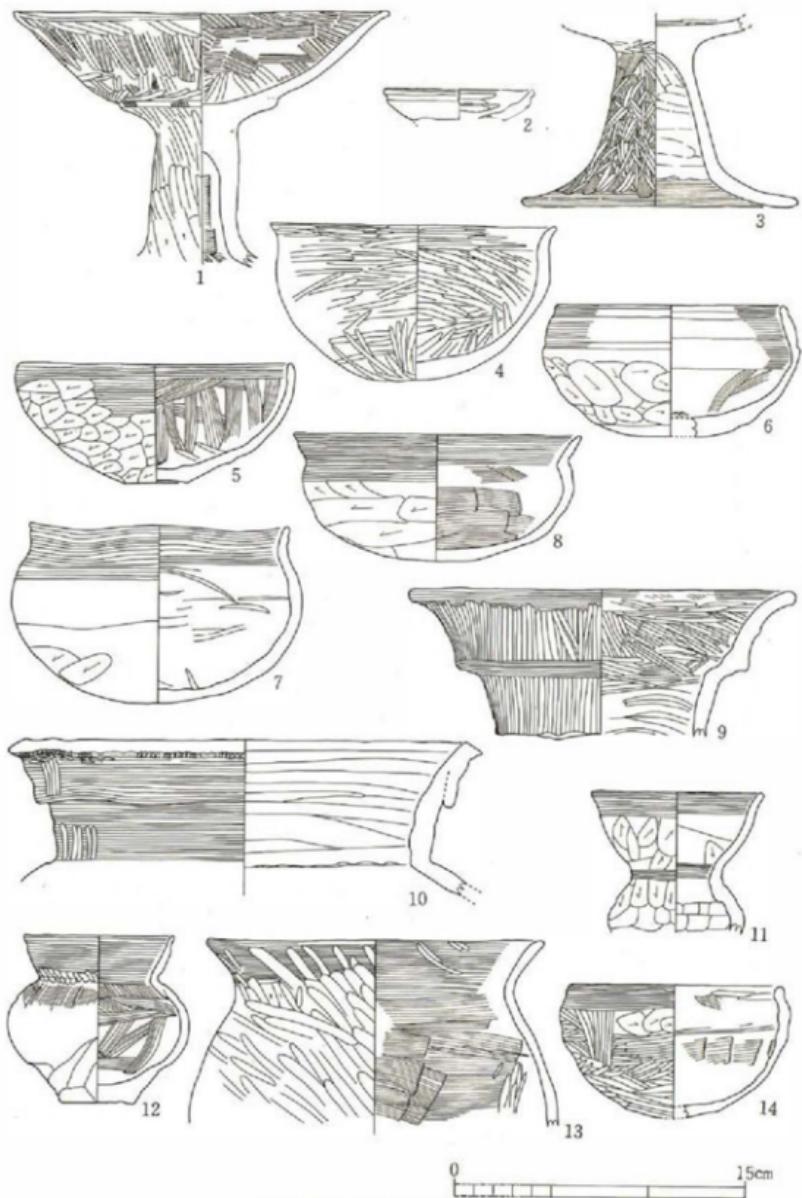




第5図 古墳時代木組み遺構平面図・セクション図



第6図 古墳時代木組み遺構立坑配置図



第7図 第II層出土遺物実測図

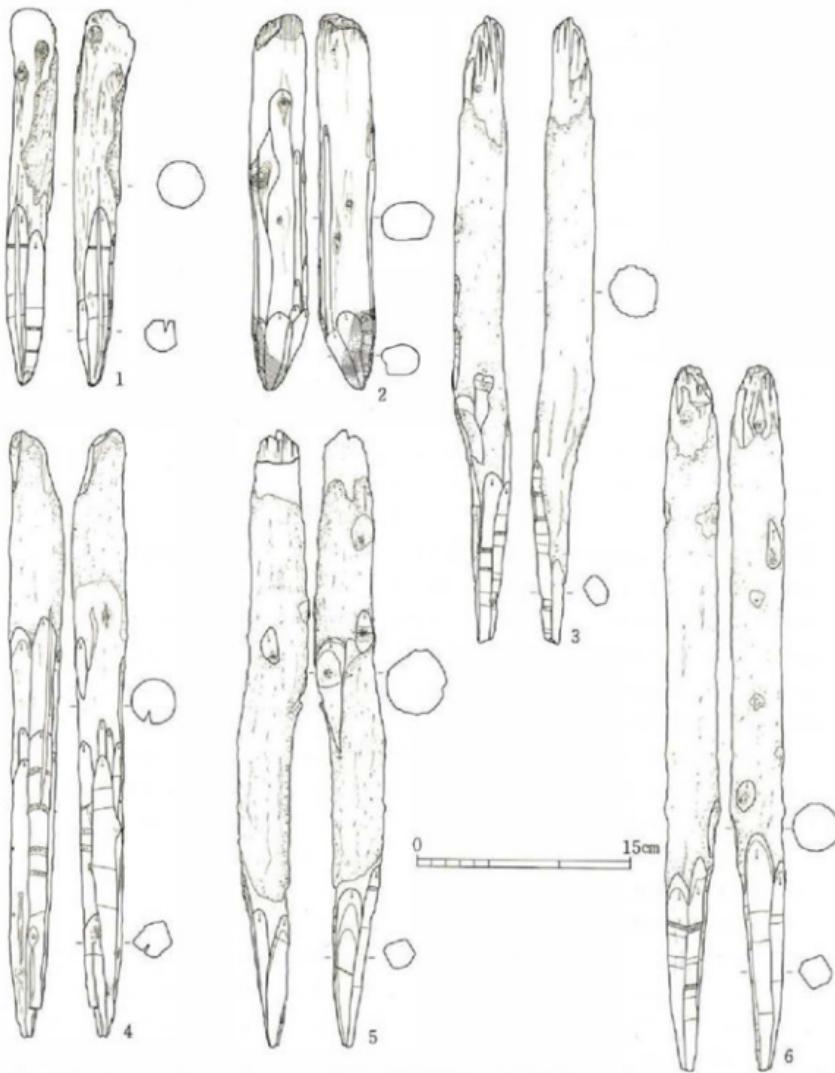


図 No	統 No	素 材	軸径存(cm)		末 端 部 位(cm)		その 他
			長さ	幅	長さ	加工回数	
第8図1	No.33	丸太材	52.8	7.0	24.5	4	3.2
第8図2	No. 6	丸太材	51.8	7.7	12.3	17	4.8
第8図3	No. 3	丸太材	87.3	7.4	32.2	9	4.0
第8図4	No.34	丸太材	84.2	7.7	52.7	16	6.0
第8図5	No. 5	丸太材	85.3	8.3	25.5	9	3.4
第8図6	No. 4	丸太材	97.8	7.8	33.0	9	3.5

第8図 木組み遺構出土杭実測図

2. 古代の遺構と遺物

(1) 遺物包含層とその出土遺物

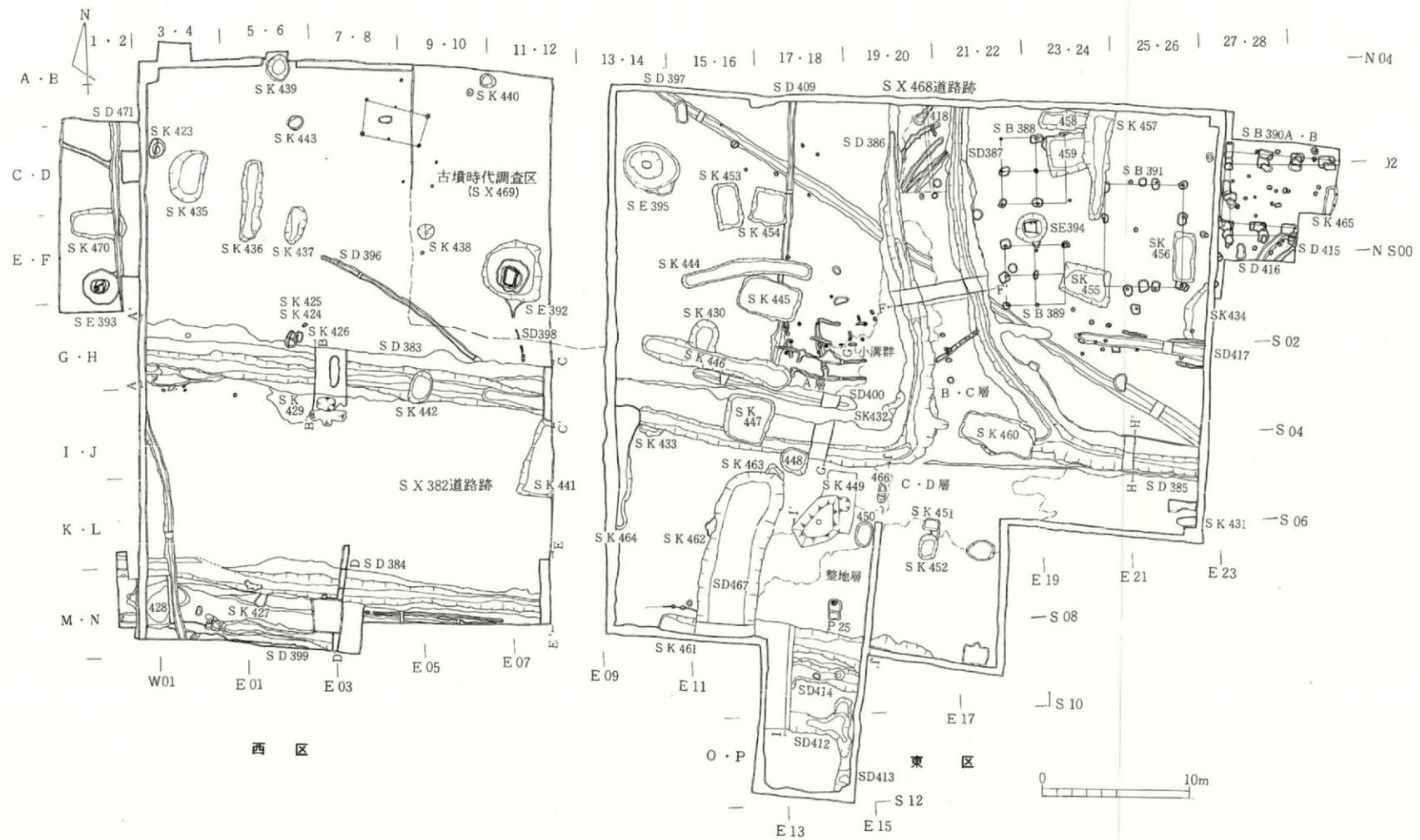
遺物包含層はA～D層の4層が確認された。各層の分布域についてはA層がSD 401～411(小溝群)の周辺で層厚は5～15cmを計る。B層はSX 468道路跡の路面東半分の一帯で、層厚5cmを計る。C層はB層の分布範囲一帯とSX 382道路跡とSX 468道路跡が接続する路面南半に分布する。層厚は10～40cmを計る。D層はC層と同じくSX 382とSX 468の接続する路面南半に分布し、層厚10～20cmを計る。

各層の土色・土質はA層が2.5Y^{6/2}暗灰黄色シルト層、灰白色火山灰粒を含む。B層が10YR^{5/6}にびい黄褐色砂質シルト層、C層が2.5Y^{6/2}暗灰黄色砂、D層が2.5Y^{6/2}黄褐色砂である。土質的にはB・C・D層が比較的良好似ており、また層の重なり具合をみても三者は連続的である。層序については新しい順にA層→道路面整地盛土層→B層→C層→D層となる。

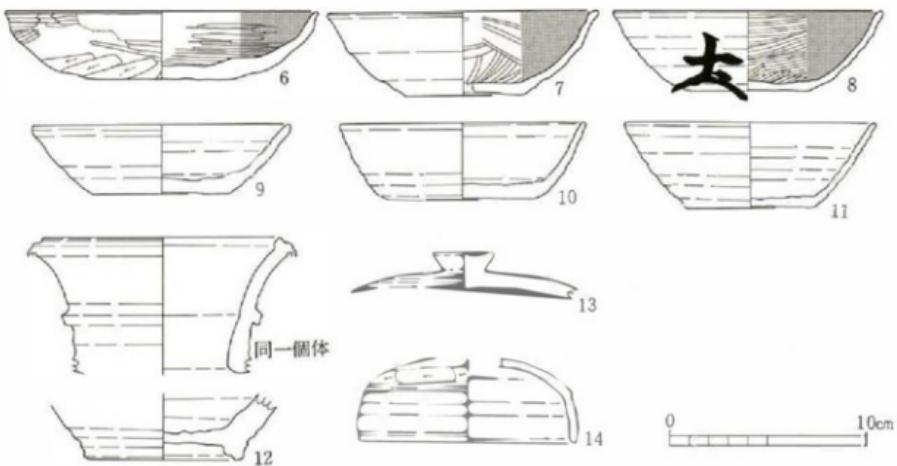
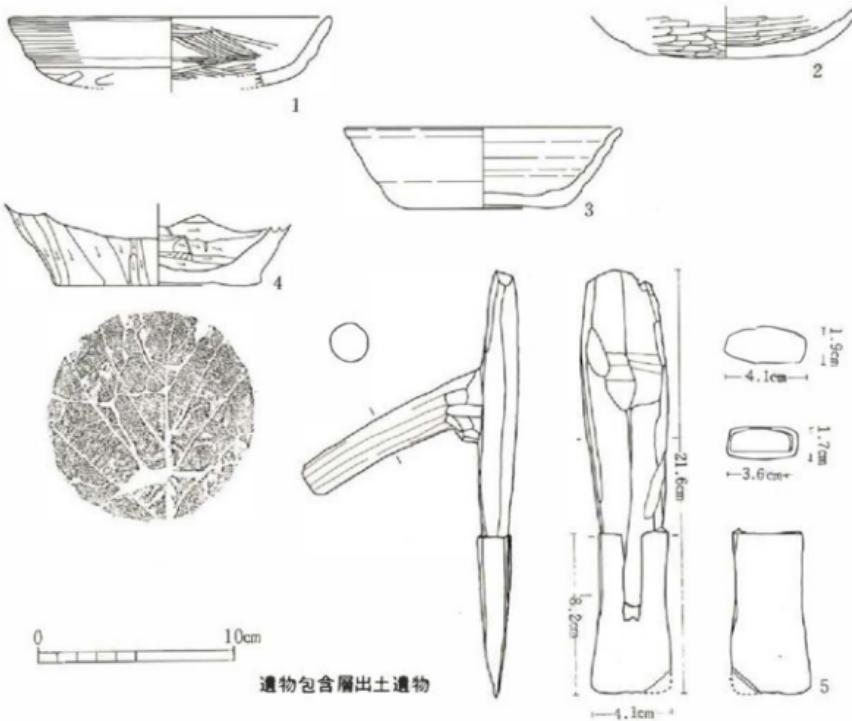
包含層の出土遺物には、A層から平瓦と使用痕のある礫、B層から土師器杯(ロクロ使用、底部回転ヘラケズリ調整のもの)。高台付杯、須恵器杯(底部切り離しがヘラ切りで、再調整が回転ヘラケズリ・手持ちヘラケズリのもの)がある。C層からは土師器杯、須恵器杯・壺・甕が出土している。土師器杯はロクロ未使用のもの(第10図1)である。外面体部に沈線的な段が付くもので、段から下は全体に丸く、体部と底部の境は不明瞭である。内面はヘラミガキが施され黒色処理されている。この他ロクロ未使用の体部に段のない杯も出土している。須恵器杯には底部がヘラ切り後手持ちヘラケズリ調整のもの(第10図3)がある。D層からは土師器杯・壺・甕、須恵器杯、平瓦が出土している。土師器杯はロクロ未使用の体部破片で体部と底部の境は不明瞭である(第10図2)。この他体部外面にゆるい段が付く破片資料もある。甕もロクロ未使用で底部に木葉痕が残る。須恵器杯は底部全面に回転ヘラケズリ調整がなされるものである。第10図5は横斧で柄の基部を残して欠損しているものである。いわゆる袋状鉄斧が着装されており、折り返しの部分が柄の後側になっている。鉄斧には部分的に朱が認められる。柄は丁寧に面取り加工されており、基部と着装部に明瞭な区別は認められない。

(2) 道路跡・側溝跡

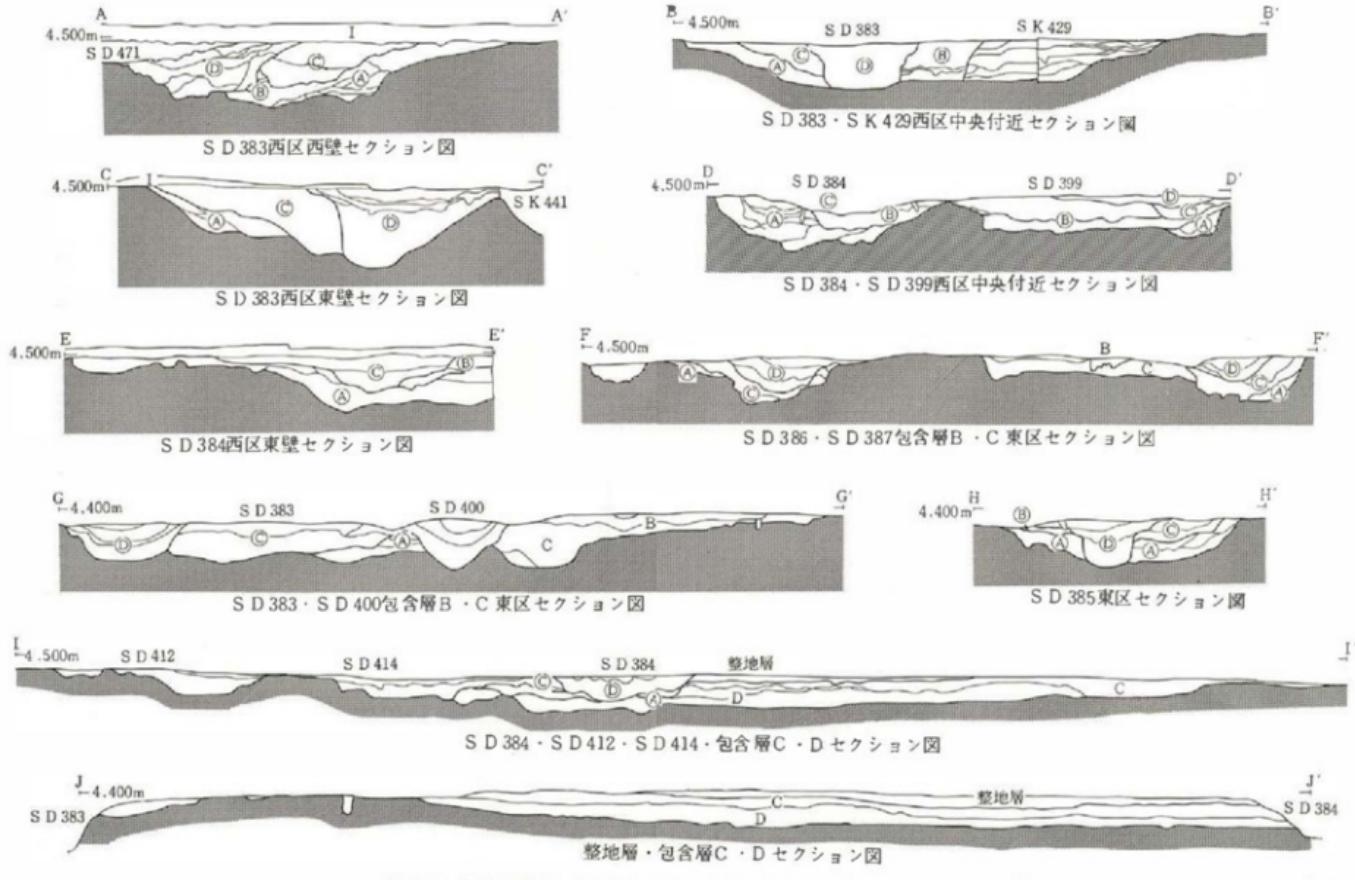
SX 382東西道路跡：調査区の南寄り、H～O～1～25グリットに位置する。中世以降の土塙・溝に切られている。以下に述べるSD 383・385北側溝、SD 384南側溝の検出および路面整地土の存在により道路跡と判断した。東西両側溝の溝心間距離(D期)は約13m～14.5m、検出面での路面幅約11～13mを計る。長さは約70mまで検出した。第4次調査区の道路心(X:-189.028.28, Y:+12.613.34)、本調査区の道路心(X:-189.045.94, Y:+12.729.82)の2点間から求められる方向はE-8°37'-Sである。SX 468南北道路と交差する付近は残存状況が良く、整地盛土層が認められた。この土層についてはこの上面より掘り込まれている柱穴(SP25)の柱根内部に灰白色火山灰が多量に混入するところから、火山灰降下以前の時期に整地盛土したものと考えられる。側溝との関係ではA期の段階、すなわち道路構築当初のものとみている。



第9図 遺構全体図



第10図 遺物包含層(上)・道路側溝跡A期出土遺物(下)



第11図 道路側溝跡・整地層・遺物包含層セクション図

0 3 m

SD 383 北側溝跡：重複関係からSK 442・424・447より古い。溝はA～D期の4期の変遷が認められた。確認できる長さは約51mで、SX 468南北道路跡西側溝SD 386とL字型に接続する。全体の規模が判明している最新のD期では幅1.3～2.0m、深さ0.4～0.8mを計る。C期は残存状況から推定すると幅2m、深さはD期より若干浅いぐらいである。位置は新しくなるにつれて道路側に並行して縮小していく。この傾向は他の側溝跡にも共通して言えることである。埋土はA期が砂層(Ⅱ層土)が互層になる自然堆積層で、断面等の観察ではさらに2～3期の小期に分けられる可能性がある。B期の埋土は一部残存しているところでみると、大別して3層に分けられ下層が砂層、中層が灰白色火山灰の自然堆積層、上層が暗灰黄色粘土層である。C期は暗灰色系の粘土で、灰白色火山灰粒が混入する。A期は、大別して2層に分けられる。上層は黒褐色系の粘土、下層が灰色系の粘土である。以上の各期の埋土状況は他の側溝跡のそれとほぼ共通している。

SD 384 南側溝跡：重複関係からSD 467・SK 461より古い。溝は他の側溝と同様に4期の変遷が認められた。確認できる長さは約54mで、比較的残存状況の良いC期では幅1～1.5m、深さ15～40cmを計る。西区ではB期の埋土が南側に隣接するSD 399B溝状造構、SK 428にオーバーフローしている様子が観察された。

SD 385 北側溝跡：重複関係からSK 460よりも古く、SD 397より新しい。溝は4時期の変遷が認められた。確認できる長さは約11mで、SX 468南北道路跡東側溝SD 387と接続する。またSK 460に壊されており明確にとらえることはできなかったが、SD 383と接続していた可能性もある。規模はD期で、幅1～1.5m、深さ0.5mを計る。

SX 468 南北道路跡：調査区の東寄り、C～J-19～21グリットに位置する。SK 460・P 19と重複しておりこれらより古い。なお、H～I-19～21グリットで検出した小溝跡、ピット群については埋土、遺物の特徴から道路機能時のものと考えている。以下に述べるSD 386西側溝・SD 387東側溝の検出、およびSX 382道路跡との連続性から道路跡と判断した。南北両側溝の溝心々間距離(D期)は約4.5m、検出面での路面幅約3.2～3.5mを計るが、SX 382との接続部分では約7.5mと幅広くなる。長さは約24mまで検出した。方向についてはやや蛇行するため明確には示せないが、座標の北に対して若干東に振れる程度でおさまるものと見られる。

SD 386 西側溝跡：SD 397と重複しておりこれより新しい。溝はA・C～D期の3期の変遷が認められた。B期については確認していないが、SK 432がこの期に伴うものと考えている。確認できる長さは約24mで、SX 382道路跡北側溝SD 383と接続する。規模はD期で幅1.2～1.5m、深さ約0.4mを計る。

SD 387 東側溝跡：SK 460と重複しておりこれより古い。溝はA～D期の4期の変遷が認められた。確認できる長さは約22mで、やや開きながらSD 385と接続する。また、C期にはSD 417と接続することを確認した。規模はD期で幅0.6～0.9m、深さ0.25～0.4m、C期で幅1.5～2.5m、深さ0.4mを計る。

〈出土遺物〉

ここで取り上げる遺物は、側溝跡出土のもの、路面上面出土のもの、整地盛上層出土のものである。各側溝跡については、前述のとおり4期の変遷があり、埋土の特徴にも共通性が認められた。したがってここでは、各側溝跡出土遺物をA～D期にまとめて記述していくことにする。

A期： 土師器杯・壺・甕・須恵器杯・蓋・壺・平瓦、円盤状土製品(須恵器甕の破片利用)、鉄滓、砥石、縄文土器、古墳時代の土師器杯・高杯、石製模造品(円盤形)、黒縞石製石器が出土しているが、いずれも破片で図示できたものは少ない。

〈土師器杯〉

製作にロクロを使用しないものと、使用したものがある。前者はわずかで後者が大半を占めている。後者は2点あり口径13.8cm、底径6.0～6.2cm、器高6.0～6.2cm、口径と底径の比は1:0.43～0.44、口径と器高の比は1:0.3～0.31である。底部の特徴には回転糸切り無調整のもの(第9図7)、ヘラ切りで手持ちヘラケズリのもの、全面回転ヘラケズリ調整のもの(第9図8)、全面手持ちヘラケズリのものがある。体部の形状は内湾しながら外傾するものである。

〈須恵器杯〉

図示できたものが4点ある。I類：2点ある(第10図9～10)。器高が3.5～3.9cmと低いのに対して底径が大きいものである。口径が12.6～13.2cmで口径:底径は1:0.53～0.57、口径:器高が1:0.26～0.30である。底部の特徴にはヘラ切り無調整のもの(Ia類)、回転糸切り後周縁を回転ヘラケズリするもの(Ib類)が認められた。II類：1点ある(第10図11)。I類に比して口径・底径とも小さく、器高が高いものである。口径:底径は1:0.51、口径:器高は1:0.34、底部の切り離しはヘラ切り無調整である。この他破片資料では回転、糸切り無調整のものが若干みられるが、主体となるのはヘラ切りのようである。この他須恵器杯蓋(第10図14)が出土しているが、これは古墳時代中期に属するもので陶邑編年のTK23～TK24型式に比定されるものである(註3)。

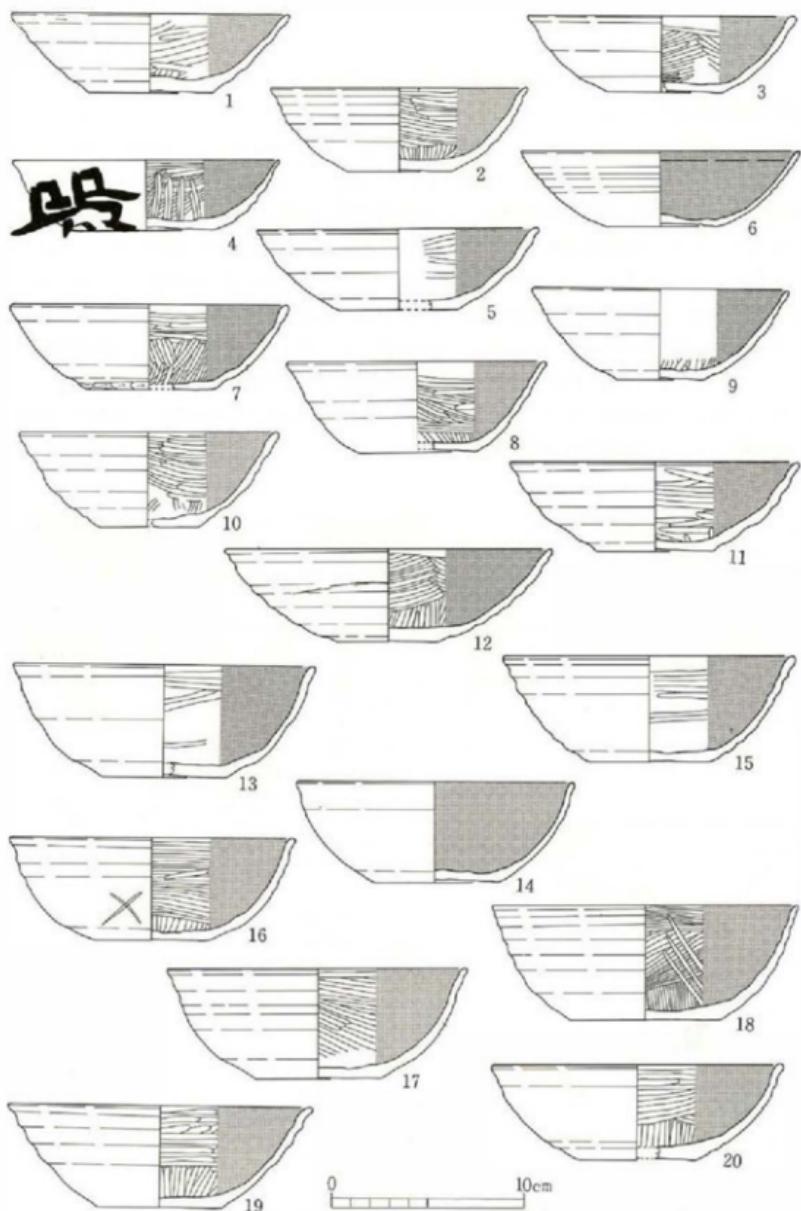
B期： 土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・壺・甕・丸瓦・平瓦、使用痕のある礫、鉄滓が出土しているが、いずれも破片で図示できたものはない。

土師器杯は製作にロクロを使用したもので、底部の特徴としては回転糸切り無調整のものと全面に手持ちヘラケズリ調整のものとがある。須恵器杯も底部の特徴として回転糸切り無調整のものとヘラ切り後ナデ調整のものとがある。またわずかであるが赤焼き土器の破片がみられる。

C期： 土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・壺・甕・赤焼き土器杯・高台付杯・平瓦・丸瓦・縁釉陶器、円盤状土製品、砥石、使用痕のある礫、漆器碗、木製盤、鉄滓が出土している。

D期： 土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・壺・甕・赤焼き土器杯・高台付杯・青磁・白磁・縁釉陶器、平瓦・丸瓦・砥石、石製模造品、使用痕のある礫、鉄滓が出土している。

C、D期については、図化できた土師器杯・高台付杯・赤焼き土器杯・高台付杯の特徴が類似するため一括して記述していく。



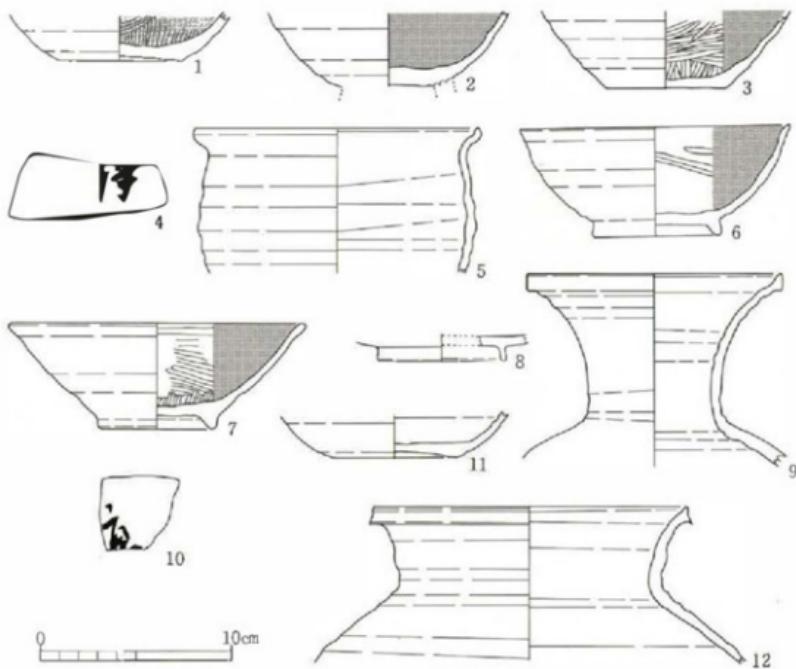
第12図 道路側溝跡C・D期出土遺物(土師器杯)

〈土師器等〉

図示できたものが22点ある。製作にすべてロクロを使用したもので、内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。

I類： 器高が3.5～4.5cm、口径：器高の比が1:0.26～0.3もので、全体に口径に対して器高が低くやや扁平な感じを受ける器形である。体部はやや丸味を持って立ち上がり体部の外傾度が割合大きい。底部の特徴には、A：回転糸切り無調整のもの、B：回転糸切りで周縁に手持ちヘラケズリ調整が施されるもの、C：回転糸切りで底部全面から周縁にかけて手持ちヘラケズリを施したもの、D：底面全面に手持ちヘラケズリ調整が施され切離しが不明なもの、E：底部全面に回転ヘラケズリ調整が施され、切離しが不明なものがある。

II類： 口径：器高の比が1:0.32～0.37のもので、I類に比して器高が高く外傾度の割合小さいものである。体部は内湾しながら外傾し口縁端部で若干外反するものと、しないものとがある。口径が13cm前後のもの（IIa類）と口径が15cm前後のもの（IIb類）とがある。底部の切り離しはすべて回転糸切りで無調整である。



第13図 道路側溝跡C・D期出土遺物(土師器・須恵器・緑釉陶器)

〈赤焼き土器杯〉

製作に際してロクロを使用しており、底部の切り離しはすべて回転糸切りで無調整である。体部の形状については、A：内湾しながら外傾するもの、B：直線的に外傾するもの、C：内湾しながら外傾し口縁端部で若干外反するものがある。この形状は以下に分類する各類に含まれている。I a 類：口径10cm前後、器高2.4～2.8cm。I b 類：口径12cm前後、器高3.0～3.8cm。I c 類：口径12～15cm前後、器高3.9～4.9cm。II 類：口径19.2cm、器高7.2cmの大形杯。

青磁： 瓶の底部破片資料である。体部下半にはシャープな回転ヘラケズリ調整がみられ、底部は上げ底状を呈している。釉は内面と体部外面の中頃までかかっている。内面には重ね焼きの痕跡が残っている。釉の色はオリーブ黄色である。胎土は淡黄色を呈し、割れ口は劈開面をなす。

白磁： 玉縁状口縁を呈する瓶の破片資料である。釉の色は灰白色、胎土は白色を呈する。

綠釉陶器： 瓶の体部下半資料で、回転ヘラケズリ調整が施されている。釉の色はオリーブ灰色、胎土は灰色を呈する。

なお、他の遺物については別章で一括して記述する。

路面上出土遺物

ロクロを使用した土師器甕が1個体ずつ出土している（第15図9～10）

整地盛土層出土遺物

土師器杯、須恵器杯・甕、平瓦の破片が出土している。土師器杯はロクロ未使用のもので口縁と体部の境にゆるい段を有している。須恵器杯は底部切り離しが回転糸切りで無調整のものである。

（3）掘立柱建物跡

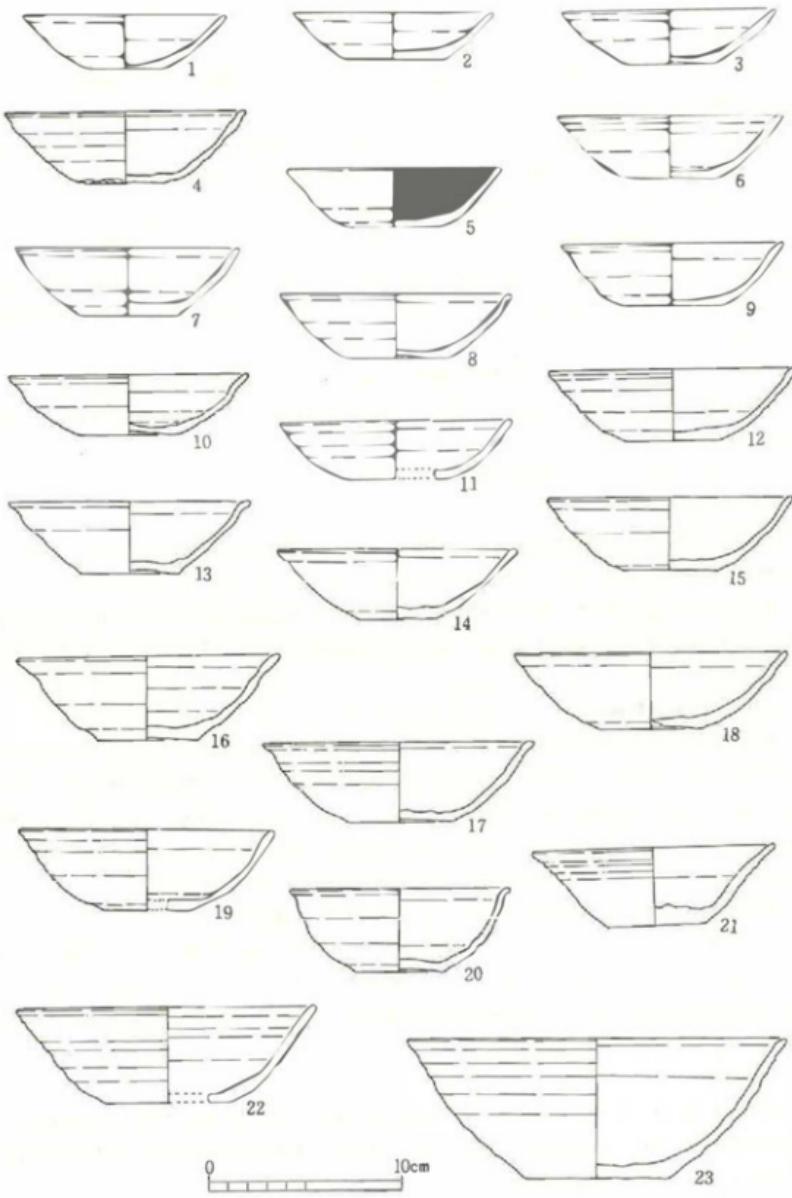
S B 388： S X 468道路跡の東側、D・E-21・22グリットに位置する。SK 459と重複しており、これより古い。東西2間×南北2間の総柱建物跡である。規模は北側柱列で、東から2.35m+1.9m、総長4.25m、西側柱列で北から2.25m+2.2m、総長4.45mを計る。方向は西側柱列においてはN-1°-Eである。柱穴は残存状況が悪いが、0.8×0.5mの隅丸方形を呈していたと思われる。柱痕跡は15～20cmの円形を呈する。出土遺物はない。

S B 389： S B 388の南側、F・G-21・22グリットに位置する。SK 455・457、S E 393と重複しており、これらより古い。東西2間×南北2間の総柱建物跡である。規模は北側柱列で東から1.95m+1.95m、総長3.9m、西側柱列で北から2m+1.9m、総長3.9mである。柱穴は残存状況が悪く、一辺70cmの隅丸方形を呈していたと思われる。柱痕跡は15～20cmの円形を呈する。出土遺物はない。

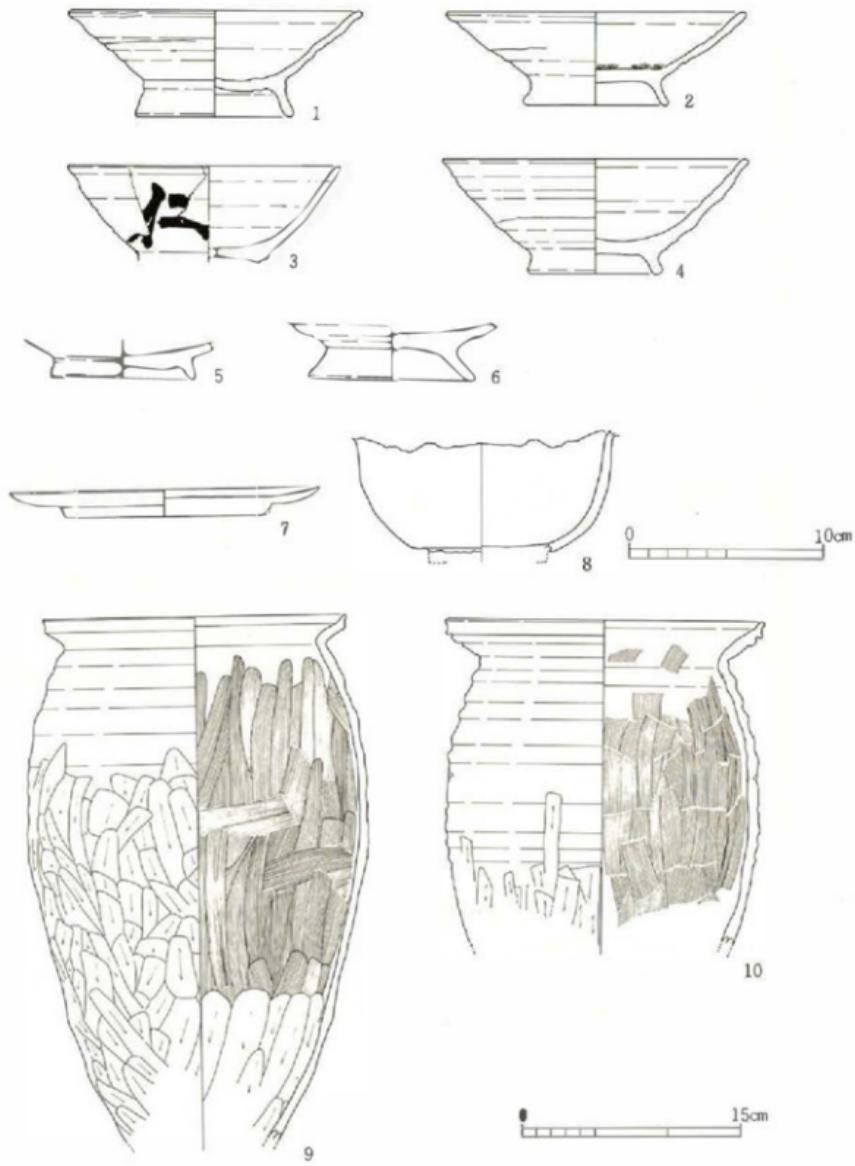
S B 390

東区北東隅、D～F-26～28グリットに位置する。東西4間以上、南北2間の東西棟掘立柱建物跡である。S D 416と重複しており、これより古い。建物跡はほぼ同位置で2時期の重複が認められた。以下古い順に記述していく。

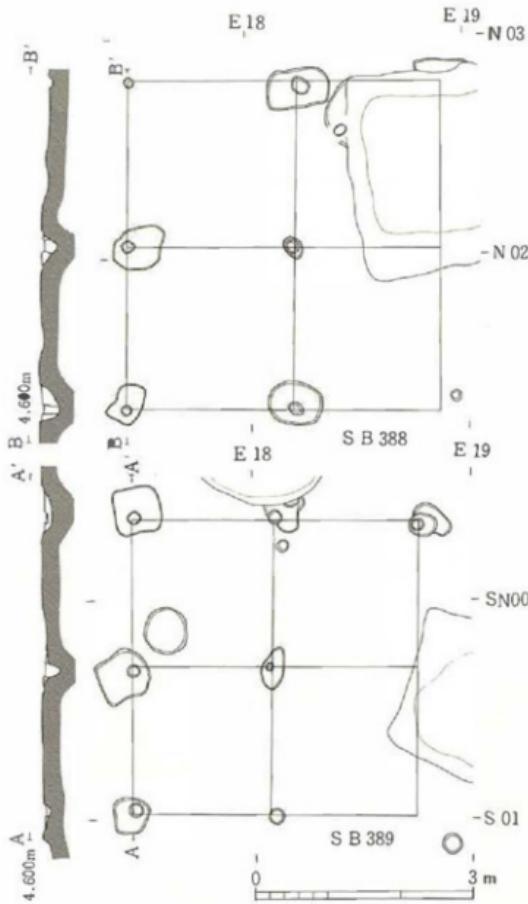
S B 390 A： 柱穴は後世の削平を受けているため残存状況が非常に悪い。規模は1m×0.5



第14図 道路側溝跡C・D期出土遺物(赤焼き土器)



第15図 道路側溝跡 C・D期・道路上面出土遺物



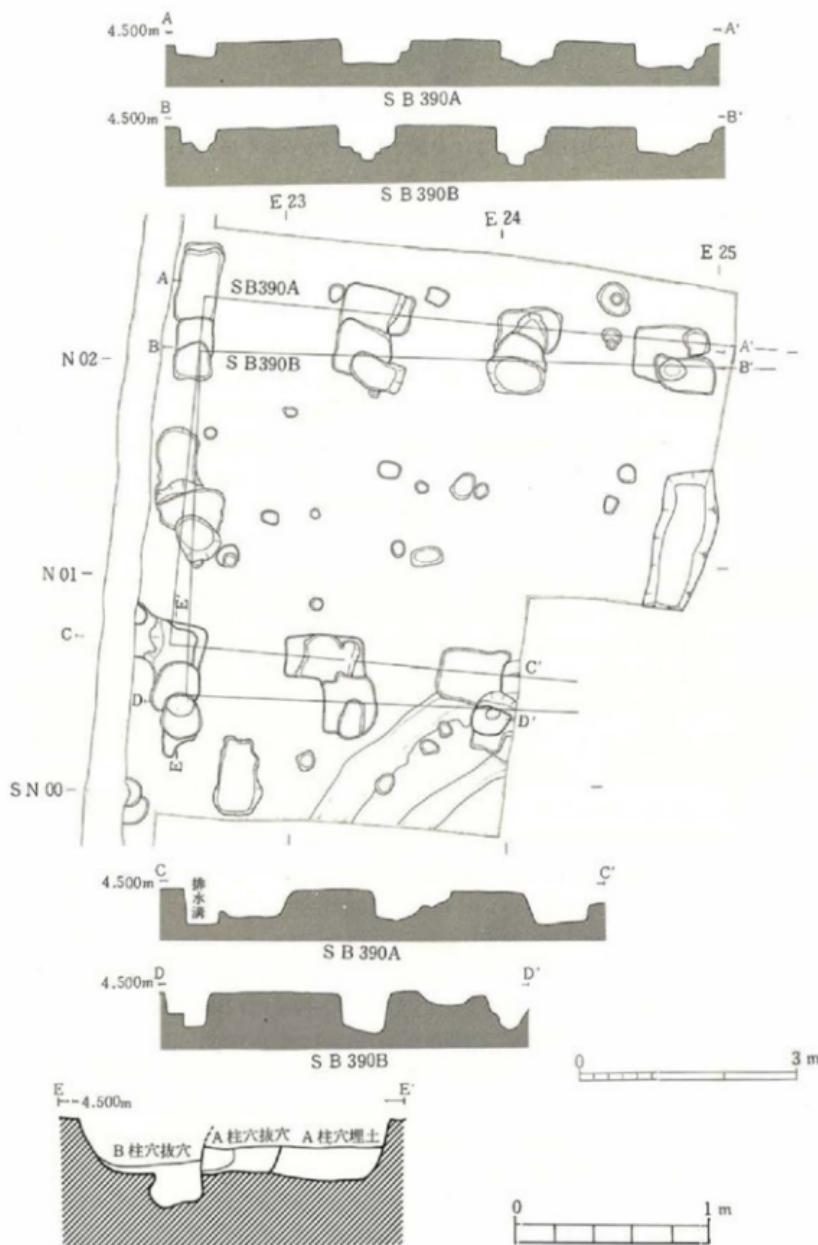
第16図 SB 388・389実例図

より $1.8\text{ m} + 1.9\text{ m} + \dots$ 東側柱列で北から $2.1\text{ m} + \dots$ を計る。方向は東側柱列においては $N - 3^{\circ} - E$ となる。柱穴は $0.6 \times 0.7\text{ m}$ の隅丸方形を呈するが、残存状況が悪く、埋土はわずかしか残っていない。柱痕跡は径 20 cm の円形を呈する。出土遺物はない。

の長方形、深さは $0.2\text{ m} \sim 0.3\text{ m}$ を計る。埋土は黒褐色粘土質シルトで黄褐色シルトブロックを含む。遺物は土師器杯・甕・須恵器の破片が出土している。土師器杯は内面に黒色処理を施したものでロクロ未使用のものである。

SB 390 B : A期の建物跡より若干南へずらして構築している。B期の柱穴にはすべて抜き取り穴が検出された。抜き取り穴から推定される方向は西側柱列で $N - 2^{\circ} - E$ となる。規模は北側柱列で、西から $2.35\text{ m} + 2.15\text{ m} + \dots$ 西側柱穴では北から $2.3\text{ m} + 2.5\text{ m}$ 、総長 4.8 m を計る。柱穴は $70 \times 80\text{ cm}$ の方形を呈し、深さは $0.4 \sim 0.5\text{ m}$ を計る。柱穴埋土は灰黄褐色シルトに黒褐色粘土質シルトブロックを含む。遺物は掘り方埋土より内面黒色処理を施したロクロ未使用の甕の破片が出土している。

SB 391 : SB 388・389とSB 390の間、E-G-23~25グリットに位置する。SK 455~457と重複しており、これらより古い。東西3間×南北3間の南北棟建物跡である。規模は西側柱列で東よ



第17図 SB 390A・B実測図

(4) 井戸跡

S E 392

F・G-9・10グリットに位置する。同じ位置でS E 392 A → S E 392 B の作り替えが認められた。

S E 392 A : 挖り方のみが検出された。掘り方の平面形は隅丸方形で、断面形は2段となる。一辺3.9m、深さは1.1mを計る。井戸側についてはS E 392 B に壊されているため不明である。掘り方南辺のほぼ中央には溝状の施設が取り付いている。長さ4.5m、幅15cm、深さ4~5cmの規模をもつ。埋土は5層に分けられるが、大別すると上層の灰黄色粘土層と下層(5層)の暗灰黄色砂層である。

遺物は土師器杯・高台付杯(第20図7~8)・甕、須恵器小壺(第20図12)・甕、平瓦・丸瓦が出土している。土師器杯・高台付杯はいずれもロクロ調整のものである。

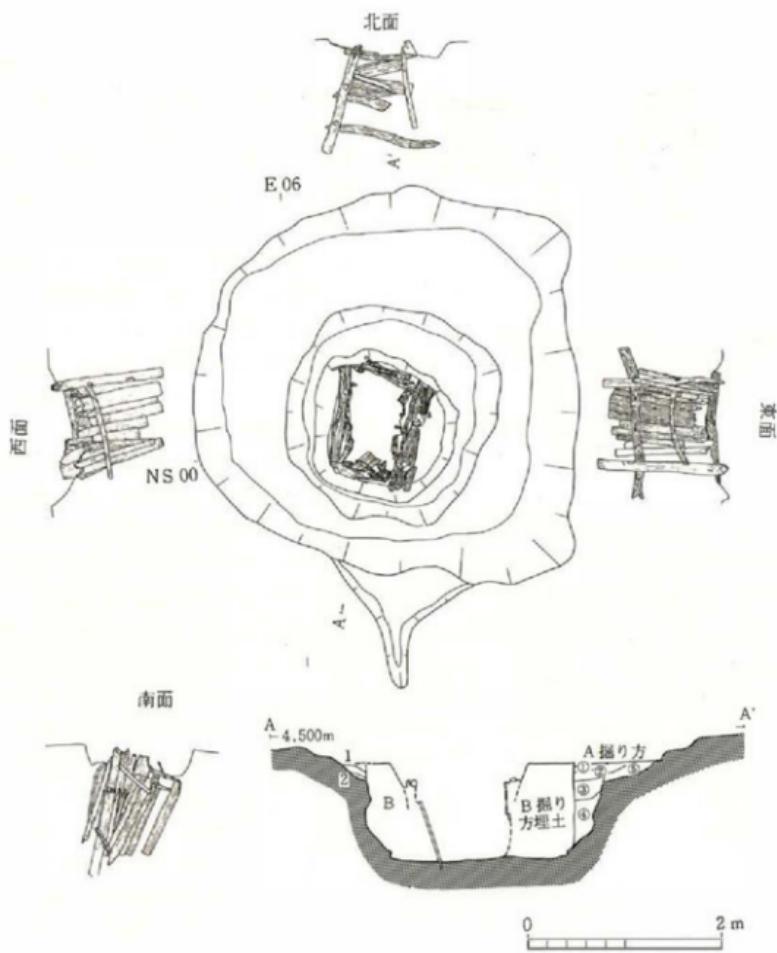
S E 392 B : 方形の木組み井戸側を持つ構造である。掘り方は隅丸方形を呈し、一辺2.1mを計る。底面はほぼ平らで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは1.25mを計る。井戸側は東西辺1m、南北辺1.2mの長方形を呈し、縦板組隅柱横棟どめで据えている。ただし北辺には横板が据えられていた。縦板材は長さ0.8~1m、幅10cm、厚さ5mm、横板材は長さ0.6m、他は縦板材と同じである。隅柱は円柱で、2段に柄穴(6×3cm)が認められるが、横棟は柄穴にはめ込んでおらず、柱と縦板材の間にはさんでいる。下部の横棟は径10cmを計る丸太材を用いている。掘り方埋土は灰白色火山灰のブロックが混じる黄褐色シルトで、井戸内埋土は黒褐色シルト質粘土である。

遺物は掘り方埋土より土師器杯・甕、須恵器杯・壺・甕の破片が出土している。井戸内埋土では土師器杯(第20図1~4)・高台付杯・甕、須恵器杯・壺(第20図11)・甕、耳皿、赤焼き土器台付皿(第20図9)、土錐がある。

S E 393 : F・G-0・1グリットに位置する。S D 471と重複しておりこれより古い。方形の木組み井戸側を持つ構造である。掘り方は不整円形を呈し、径2.4mを計る。深さは0.6mである。井戸側は東西辺0.5m、南北辺0.8mの長方形を呈していたと思われるが、西側より土圧で崩れたようになって検出した。井戸側は縦板組隅柱横棟どめで据えているが、東辺のみ縦板の上に横板が組まれていた。縦板材は四面に2枚ずつ用い、長さ0.55m~0.7m幅0.3mを計る。井戸底には曲物(第22図1)の水溜めを備えている。掘り方埋土は黒褐色粘土と黄色シルトブロックが混じり合う層が主体をなしている。井戸内埋土は上層が黒褐色粘土を主体とするのに対し、下層(井戸側内)は植物遺体を含む粘土層→砂層の堆積が見られた。

遺物は掘り方埋土より土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・壺・甕、赤焼き土器杯(第20図1)・高台付杯が出土している。土師器杯はロクロ未使用のもので、底部切り離しが回転系切り無調整である。井戸内埋土の出土遺物には土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器杯・高台付杯、平瓦、使用痕のある礫がある。

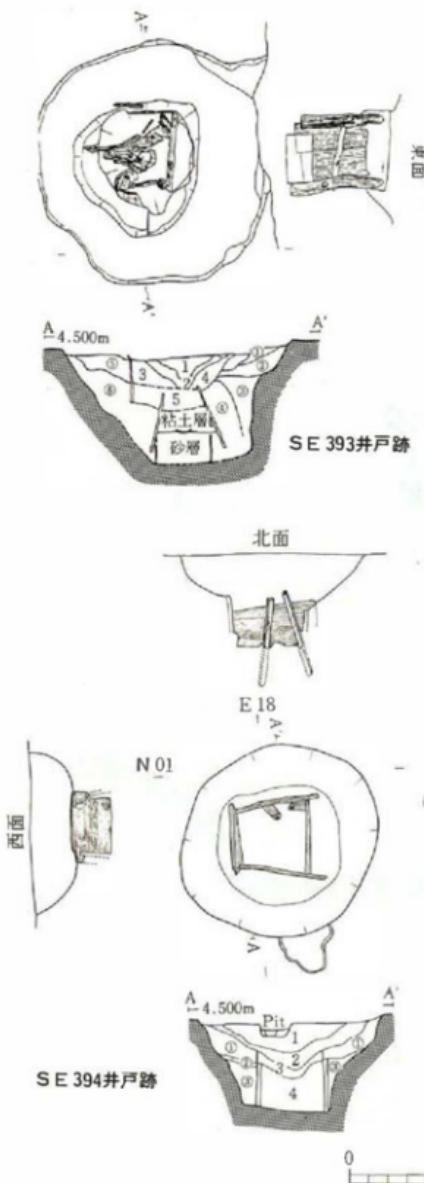
S E 394 : E・F-21・22グリットに位置する。S B 389と重複しておりこれより新しい。方形の木組み井戸側を持つ構造である。掘り方は円形を呈し、径2m、深さ1mを計



土層記

- | | | |
|------------------|--------|--|
| 1 10YR 4/2灰褐色 | 粘土質シルト | 砂紋を多く含み酸化鉄の小班を含む |
| 2 10YR 4/2灰褐色 | 粘 土 | 炭化物粒、わざらな砂粒を含む |
| ① 10YR 4/2に近い黄褐色 | 粘土質シルト | 砂粒を多く含み酸化鉄斑を含み 2.5Y 4/2に近い黄色シルトブロックを含む |
| ② 10YR 4/2灰褐色 | 粘 土 | 上面に砂粒を含むわざらに炭化物粒を含む |
| ③ 2.5Y 4/2灰褐色 | 粘 土 | 2.5CY 4/2オリーブ灰砂のブロック |
| ④ 2.5Y 4/2黄褐色 | 粘 土 | 砂粒を多く含む植物遺体・小石を含む |
| ⑤ 2.5Y 4/2灰褐色 | 砂 | 10YR 4/2灰褐色粘土のブロックを含む |

第18図 SE 392A・B 井戸跡実測図



第19図 SE 393・394井戸跡実測図

る。井戸側は横板を方形に組み四隅を角柱あるいは丸柱でおさえるタイプである。板の寸法は東辺と西辺が長さ0.9m、幅0.4m、厚さ5cm、北辺と南辺が長さ0.75m、幅0.4m、厚さ5cmである。井戸側の平面形は長方形を呈していたと思われる。掘り方埋土は3層に分けられるが、大別してすると2層で、上層が灰黄褐色シルトと黄色シルトの混じり合う層。下層が黄橙色シルトである。井戸内埋土は4層に分けられ、3・4層がシルト質粘土。2層中には灰白色火山灰のブロックが含まれる。1層は人為的な埋め戻しの可能性がある。

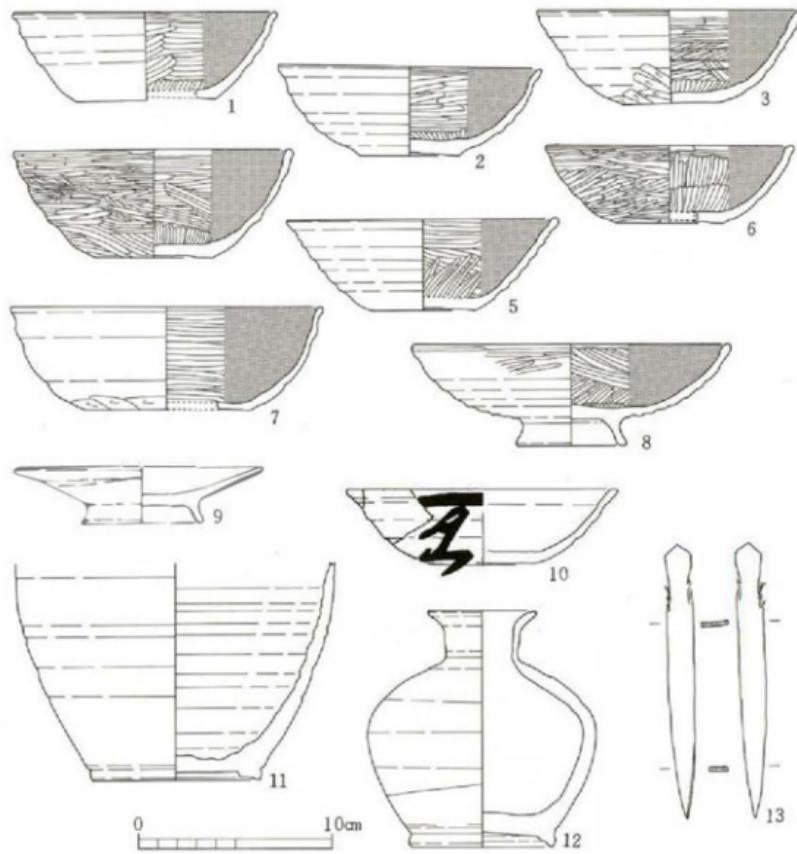
遺物は掘り方埋土より須恵器杯、井戸内埋土から土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器高台付杯、平瓦が出土している。

SE 395

D・E-13・14グリットに位置する。ほぼ同じ位置でSE 395A→SE 395Bの作り替えが認められた。

SE 395A：掘り方の一部と井戸底を検出した。形態についてはSE 395Bに壊されており不明であるが、深さは0.95mを計る。井戸底には曲物（上段径40m、高さ22.7cm、下段径38cm、高さ19.5cm）を重ねて据え水溜めとしている。上段の曲物の際には平瓦を1枚置いておさえとしている。掘り方埋土は3層に分けられる。

遺物は土師器杯・甕、須

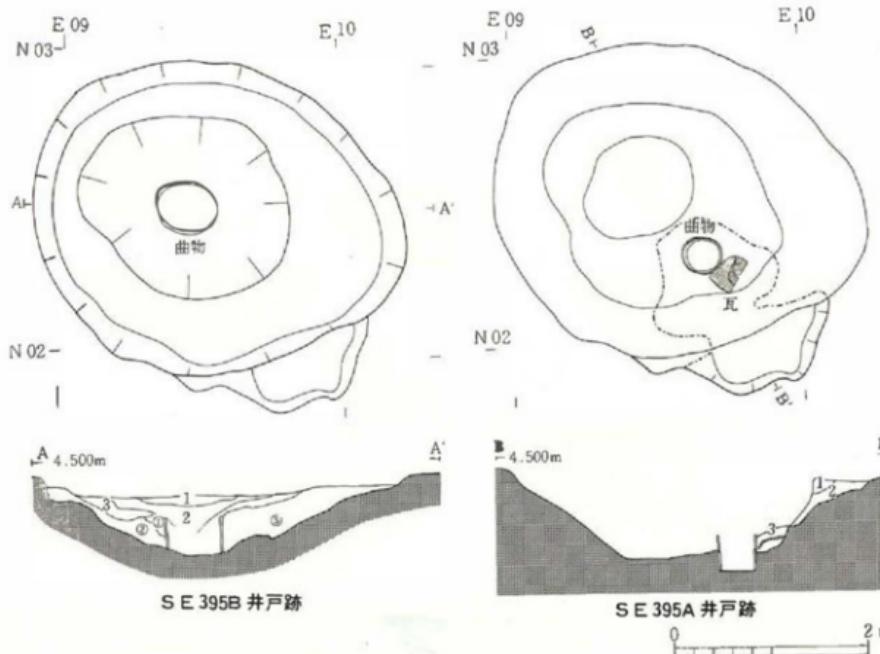


第20図 SE 392A・B井戸跡出土遺物実測図

恵器甕、赤焼き土器高台付杯、平瓦（第23図5）が出土している。

SE 395 B：掘り方は不整円形を呈し、長径3.8m、短径3.25m、深さ0.85mを計る。井戸底には径60cm、高さ30cmの曲物を水溜め用として据えているが、その上部構造については不明である。掘り方埋土は砂層を主体とし、それに若干黒色粘土ブロックが混じる。井戸内埋土は褐色系の粘土層が主体である。

遺物は掘り方埋土から土師器杯・高台付杯・甕・須恵器杯・甕・赤焼き土器杯・丸瓦、使用痕のある礫、弥生土器が出土している。井戸内埋土では土師器杯（墨書き・第23図2・4）、高台付杯・須恵器杯・壺・甕・赤焼き土器杯・軒丸瓦・平瓦、砥石、使用痕のある礫がある。



土層 記 記

SE 393

- | | | |
|-------------|-----|----------------------------|
| 1 2.5YR 黒褐色 | 粘 土 | わずかに酸化鉄沈殿を含む |
| 2 5YR オリーブ黒 | 粘 土 | 左辺は下部に2.5YR 黃褐色砂を解状に含む |
| 3 2.5YR 黑褐色 | 粘 土 | わずかに酸化鉄沈殿を含む |
| 4 2.5YR 黑褐色 | 粘 土 | 上部に酸化鉄を含む |
| 5 2.5YR 黒褐色 | 粘 土 | 2.5YR 黃褐色粘土をブロックで含む |
| ① 2.5YR 黒褐色 | 粘 土 | 2.5YR 黃褐色シルトシルトブロックを含む |
| ② 2.5YR 黑褐色 | 粘 土 | 2.5YR に近い黄色シルトブロックを①より多く含む |
| ③ 5G 黄褐色 | 砂 | 2.5YR 黄褐色砂を下部に層状に含む |
| ④ 5YR オリーブ黒 | 粘 土 | |
| ⑤ 10YR 黒褐色 | 粘 土 | |
| ⑥ 2.5YR 黄褐色 | 砂 | |

SE 394

- | | | |
|---------------|--------|------------------------------|
| 1 10YR 黄褐色 | シルト | 褐色粘質土と黄色砂質土がまじる カーボン含む |
| 2 10YR 黄褐色 | 粘土質シルト | 灰白色火山灰小ブロックとカーボン含む |
| 3 7.5YR 黄 | シルト | 薄砂と粘土質土がまじる |
| 4 7.5YR 黄 | 粘土質シルト | 灰褐色シルトと黄色シルト(地山土)が互層になるカーボン含 |
| ① 10YR 黄褐色 | シルト | |
| ② 10YR 黄褐色 | 粘質シルト | |
| ③ 10YR 黄に近い黄橙 | シルト | |

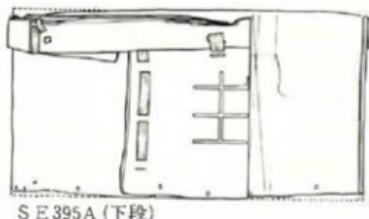
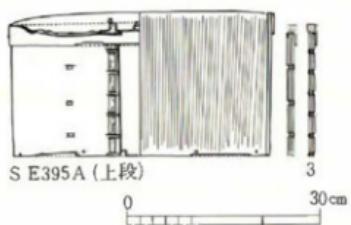
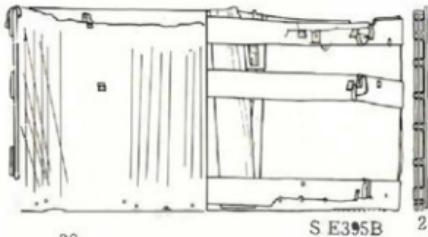
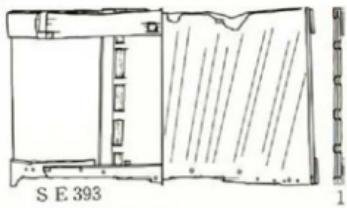
SE 395B

- | | | |
|--------------|-------|------------------------------|
| 1 10YR 黑褐色 | 粘 土 | 下層に砂質土ブロック含む |
| 2 10YR 黑褐色 | 粘 土 | 砂質土を若干含む |
| 3 10YR 黑褐色 | 粘土シルト | 砂質土(粗砂を多く含む) |
| ① 10YR 黑褐色 | 粘 土 | (砂質土若干含む) 2.5YR 黑褐色粘土が下部を占める |
| ② 2.5YR 黑褐色 | 砂 | 2.5YR 黑褐色粘土ブロックを含む 酸化鉄も見られる |
| ③ 5YR 黑 オリーブ | 砂 | 砂と2.5YR 黄褐色粘土及び酸化した砂の互層 |

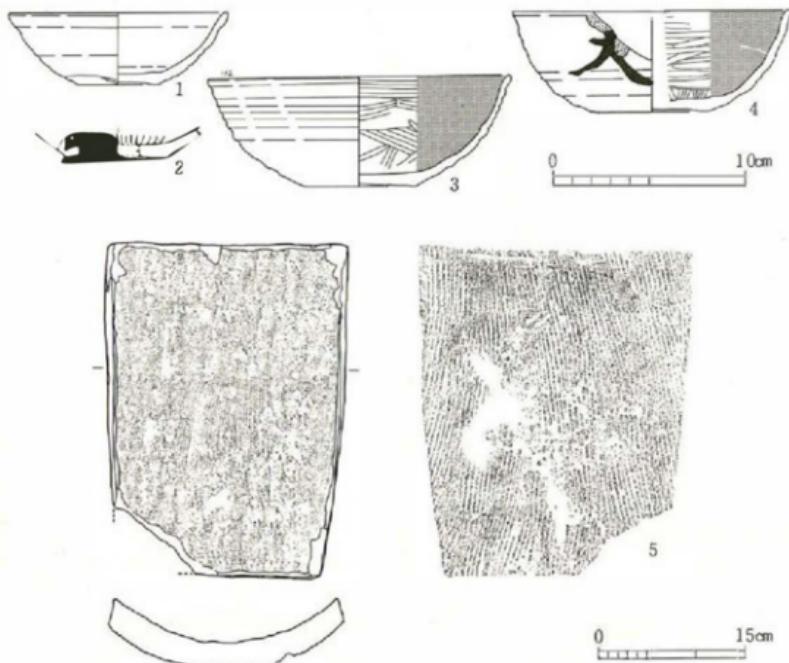
SE 395A

- | | | |
|--------------|-----|-------------------------|
| 1 10YR 黄 黄褐色 | シルト | 焼土炭化物含む |
| 2 2.5YR 嗜好黃 | 砂 | 巨層シルトブロックを含む |
| 3 10YR 黑 | 粗 砂 | 2.5YR オリーブ 黑褐色粘土ブロックを含む |

第21図 SE 395A・B 井戸跡実測図



第22図 井戸跡出土曲物実側図



第23図 SE 393・394・395井戸跡出土遺物

(5) 溝跡

SD 396：西区、C～H-0～9グリットに位置する。方向は約E-30°-Sである。重複関係からSD 383・471より古い。確認できる長さは約32mで、幅0.3～0.4m、深さ約0.3mを計る。底面は丸味を帯び壁は内湾気味に立ち上がる。埋土は2層に分けられ、灰黄褐色粘土が主体をなす。遺物は出土していない。

SD 397：東区、B～K-13～25グリットに位置する。方向は約E-35°-Sである。重複関係からSD 387・385・467・409、SB 389より古い。また遺物包含層B・Cに覆われる。確認できる長さは約44mで、幅0.6～1.2m、深さ15～30cmを計る。埋土は3層に分けられるが、おおむね褐色シルトである。遺物は内外面に段を有するロクロの不使用の土師器杯(第25図)・甕・須恵器甕が出土している。

SD 398：西区、H-10グリットに位置する。SE 392 Aとの形態的連続性から同井戸に付属する施設と考えられる。確認できる長さは2.3mで、幅10cm、深さ10cmを計る。埋土は灰褐色粘土であり、SE 392 Aの掘り方埋土に近似する。遺物は出土していない。

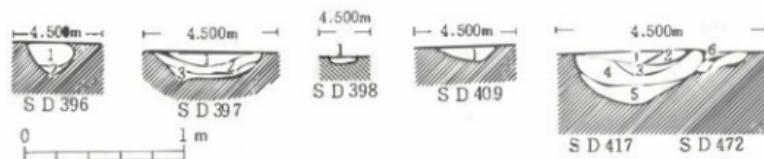
SD 399：西区、M～O-1～10グリットに位置する。溝跡は古い順にA～D期の4期の

変遷が認められた。確認できる長さは約15mで、各期において幅・深さとも様々である。方向はSD 384道路側溝跡とほぼ平行する。B期は重複関係からSK 428・SD 384Cより古く、SD 384Aより新しい。埋土はA期が暗灰黄色粘土、B期が灰色系の粘土で上面に灰白色火山灰層がある。C期は暗灰黄色粘土で灰白色火山灰が小ブロックあるいは粒状に混入する。D期は灰黄褐色粘土である。遺物はB期が土師器杯・須恵器杯・甕、C期が土師器杯・甕・須恵器・甕、D期が土師器杯・甕・赤焼き土器杯・須恵器杯・甕が出土している。

SD 400：東区、I～J-14～17グリットに位置する。重複関係からSD 383D・SK 446より古く、SD 383A・Bより新しい。遺物包含層A上面より掘り込まれ、SD 383Cと同時に埋まっている。方向はSD 383道路側溝跡とほぼ平行する。長さ11.3m、幅0.8～1.0m、深さ0.5mを計る。埋土は、灰白色火山灰粒を含む暗灰黄色シルトである。遺物は土師器杯・赤焼き土器杯・須恵器杯・甕・平瓦・丸瓦が出土している。

SD 401～411（小溝群）：東区、H～I-16～18の遺物包含層A上面で検出した。重複関係よりSD 409より新しい。ただし小溝群内においても重複が認められた。方向は東西方向のものと南北方向のものとがある。残存状況が悪いが比較的良いもので長さ6.1m、幅0.2～0.3m、深さ2～5cmを計る。埋土は暗灰黄色シルトである。遺物は土師器杯・甕・須恵器杯・甕・平瓦・丸瓦が出土している。

SD 412：東区、O～P-16～17グリットに位置する。SD 413とL字型に交わりSD 384側溝跡とほぼ平行する。確認できる長さは約4m、で幅1～1.3m、深さ0.2～0.25mを計



土層 記

SD 396

- 1 10YR 4/6黄褐色 粘土
- 2 10YR 4/6黄褐色 粘土

SD 397

- 1 10YR 4/6褐色 シルト
- 2 10YR 4/6褐色 粘土質シルト
- 3 10YR 4/6黄褐色 シルト

SD 398

- 1 10YR 4/6灰黄褐色 粘土

SD 409

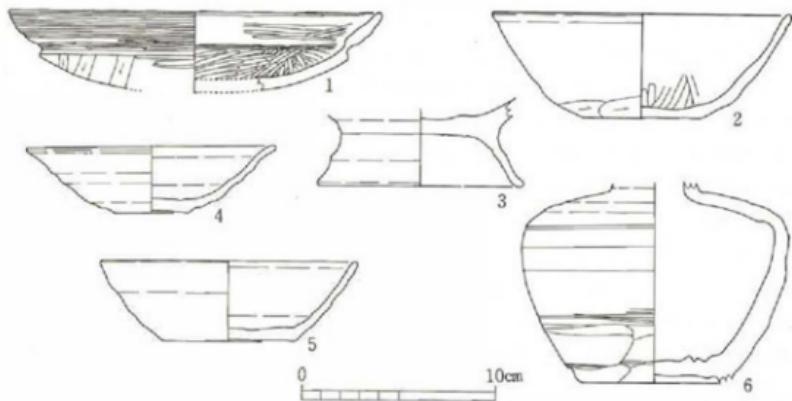
- 1 10YR 4/6灰黄褐色 シルト

SD 417・472

- | | | | | | | |
|-------------------|-------------------|------------------|-----------------------|--------------------------|------------------------|------------------------|
| 1 10YR 4/6黄褐色 シルト | 2 2.5Y 4/6黄褐色 シルト | 3 2.5Y 4/6黄褐色 粘土 | 4 2.5Y 4/6灰黄褐色 粘土質シルト | 5 2.5Y 4/6黄褐色 シルト | 6 2.5Y 4/6灰黄褐色 シルト | 7 7.5Y 4/6黄褐色 シルト |
| 泥化物粒酸化鉄マンガン粒を含む | 泥化鉄をわずかに含む | 酸化鉄をわずかに含む | 泥化鉄を含む | 2.5Y 4/6灰黄褐色粘土ブロック酸化鉄を含む | 2.5Y 4/6灰黄褐色シルトブロックを含む | 2.5Y 4/6灰黄褐色粘土質ブロックを含む |

本炭粒を含む

第24図 溝跡セクション図



第25図 溝跡出土遺物

る。埋土はSD 384 C・SD 414と近似したものでこれらとほぼ同時に埋まっている。遺物は土師器甕・須恵器杯・甕が出土している。

SD 413： 東区、P～R-17グリットに位置する。SD 412とL字型に交わり、北側に突出部を持つ。確認できる長さは6.5mで、幅約1m、深さ0.1～0.2mを計る。埋土はSD 412と近似しており同時に埋まっている。遺物は土師器甕が出土している。

SD 414： 東区、O～P-16～17グリットに位置する。重複関係よりSD 384 Dより古い。方向はSD 384 Cとはほぼ平行する。確認できる長さは4.6mで、幅1～1.8m、深さ0.2mを計る。埋土はSD 384 C・SD 412と近似する。遺物は土師器杯・甕・須恵器杯・甕が出土している。

SD 415： 東区、F～G-27～28グリットに位置する。形態は弧状を呈するものと思われ、長さ1.3m、幅0.3～0.4m、深さ10cmを計る。埋土は黒色粘土質シルトである。遺物は土師器杯・甕が出土している。

SD 416： 東区、F～G-27～28グリットに位置する。重複関係よりSB 390より新しい。形態は弧状を呈するものと思われ長さ3m、幅0.5m、深さ10～15cmを計る。埋土は黒色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

SD 417： 東区、H～I-21～25グリットに位置する。重複関係よりSD 397より新しい。SD 386 C側溝跡とH-21グリット付近で接続し、一端約1.5mの幅を持って途切れる。方向はSD 385側溝跡とはほぼ平行する。確認できる長さは約14mで、幅0.7～1m、深さ30cmを計る。埋土は5層に分けられるが大別すると2層で、上層が褐色系のシルト、下層が黄色系の粘土質シルトである。遺物は須恵器甕が出土している。

SD 418～422： C～E-19～20グリットに位置する。遺物包含層Bにおおわれ、II層上面で検出した。およそN-45°-Eの方向をとる。いずれも幅0.3m前後、深さ10～20cmを計る。

埋土は包含層Bに良く似た黄褐色系の砂質シルトの単層である。遺物は土師器杯（ロクロ使用・底部回転糸切り無調整）・甕、須恵器杯（ヘラ切り→ナデ調整）・甕が出土している。

(6) 土塚

SK 423：C-2グリットに位置する。平面形は不整梢円形、断面形は舟底型を呈する。規模は長径1.34m、短径1.06m、深さ0.3mを計る。遺物は土師器杯、須恵器杯が少量出土している。

SK 424：H-5グリットに位置する。SD 383・SK 425と重複しており、これらより新しい。平面形は不整梢円形を呈する。規模は長形0.7m、短形0.65m、深さ0.3mを計る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトの単層である。遺物は土師器杯が出土している。

SK 425：G・H-5グリットに位置する。SK 424と重複しており、これより古い。平面形は隅丸方形状を呈するものと思われる。規模は長軸0.7m以上、短軸0.5m、深さ0.2mを計る。埋土は2層に分けられ、1層はSK 424と良く似た粘土質シルトである。遺物は土師器杯・甕、古墳時代（南小泉式）の土師器高杯が出土している。

SK 426：G・H-5グリットに位置する。平面形は不整方形を呈する。規模は長軸0.7m、短軸0.46m、深さ0.1mを計る。遺物は土師器杯・甕、赤焼き土器杯が出土している。

SK 427：M・N-4グリットに位置する。重複関係からSD 399より古く、SD 384Aより新しい。平面形は梢円形で南辺では段掘り状になる。規模は長径1.19m、短径0.50m、深さ0.3mを計る。埋土は灰黄褐色粘土で、底面近くに植物遺体を多量に含む。遺物は土師器杯（漆付着片）・小形甕が出土している。

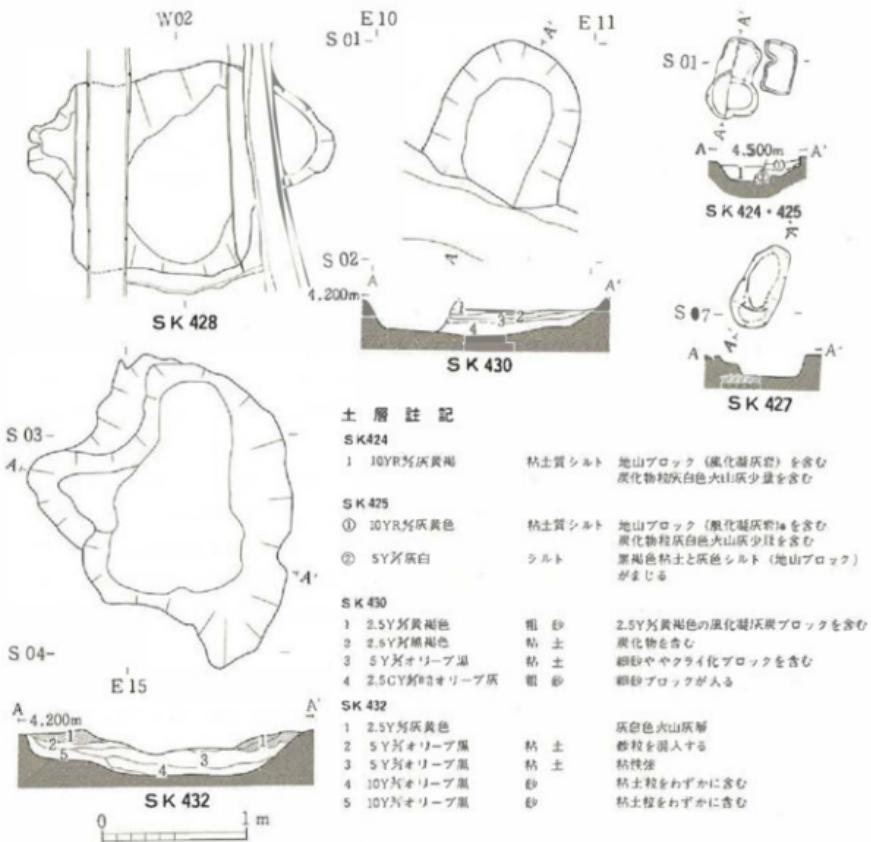
SK 428：M・N-12グリットに位置する。重複関係からSD 399Bより古く、SD 384Aより新しい。平面形は不整形を呈する。規模は長軸4.23m、短軸2.92m、深さ0.8mを計る。埋土は暗灰黄色粘土で下層ほど黒味を帯びる。土師器杯（第33図3～6）・甕、須恵器杯・壺、灰釉陶器碗（黒篭90号窓式）、古墳時代（南小泉式）の土師器杯、砥石の遺物が出土している。

SK 429：I-4・5グリットに位置する。SD 383Aと重複しており、これより古い。平面形は不整形で、壁は南辺で緩やかに立ち上がる。規模は幅2.15m以上、深さ0.4mを計る。埋土は砂層と粘土層が互層になる自然堆積層である。遺物は須恵器杯（墨書：第33図12）・甕が出土している。

SK 430：H-14グリットに位置する。SK 446と重複しており、これより古い。平面形は梢円形を呈していたと思われる。規模は長径2.06m以上、短径2m、深さ0.53mを計る。埋土は大別すると3層で、上・下層がシルトブロックを含む粗砂層、中層が黒褐色系粘土である。遺物は土師器杯・甕、須恵器壺・甕の転用硯、赤焼き土器杯、縁釉陶器、丸瓦が出土している。

SK 431：L・M-25グリットに位置する。平面形は長梢円形と思われ、断面形はU字型を呈する。長径1.3m以上、短径0.7m、深さ0.38mを計る。埋土は黒褐色シルト質粘土である。遺物は土師器杯・甕、須恵器甕が出土している。

SK 432：I～K-18～19グリットの遺物包含層A上面で検出した。重複関係からSD 386Cより古く、SD 386Aより新しい。平面形は不整円形で、底面に段を有する。規模は長径4.45



第26図 土塙実測図

m、短径3.7m、深さ0.64mを計る。埋土は8層に分けられ、1層が灰白色火山灰の自然堆積層。その下層は黒色粘土を主体をしている。遺物は土師器杯(第33図8・9)・甕・須恵器杯(第33図13)・高台付杯・壺・甕・赤焼き土器杯・軒平瓦・平瓦が出土している。

SK 433: J-13グリットに位置する。S D 383 Dと重複しており、これより古い。平面形は隅丸方形を呈していたと思われる。規模は長軸1.54m以上、短軸0.9m、深さ0.4mを計る。埋土は6層に分けられ、1・3層に灰白色火山灰のブロックが混入している。遺物は土師器杯・須恵器甕が出土している。

SK 434: G-H-25グリットに位置する。平面形は不整形を呈する。規模は長軸3.76m、短軸1.4m以上、深さ0.19mを計る。遺物は土師器杯・須恵器壺が出土している。

3. 石製品

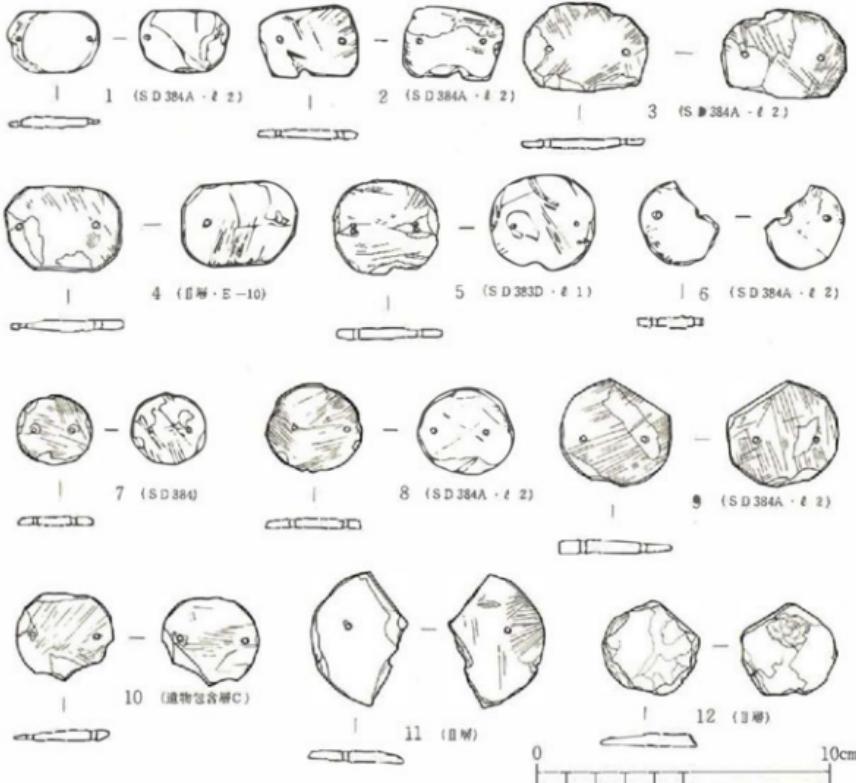
石製品には、石製模造品、石器、砥石、使用痕・加工痕のある礫が出土している。

〈石製模造品〉 第27図 1~12

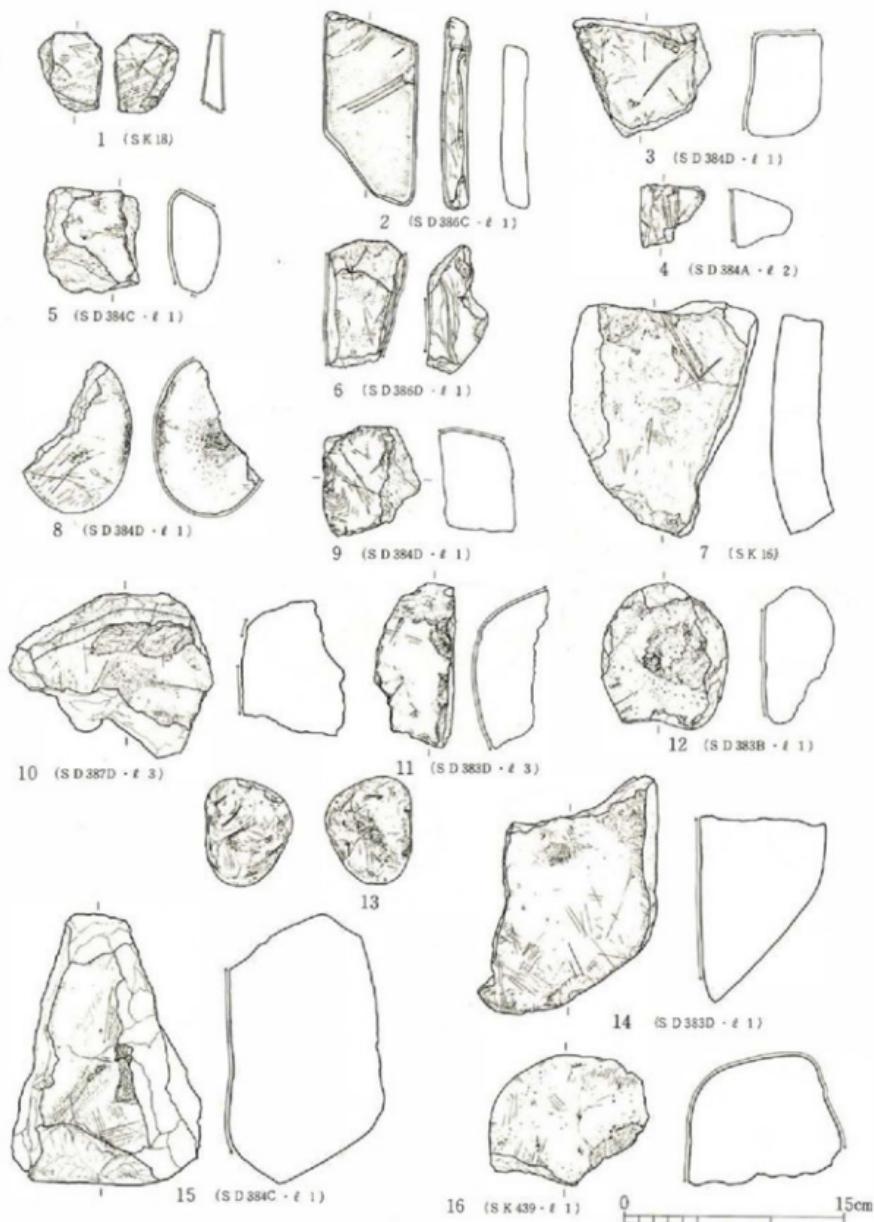
基本層第Ⅱ層、道路側溝跡埋土から11点出土している。形態は円盤形を呈するものが多いが中には溝丸長方形のものもある。大きさは径2.5~5cm、厚さ3~5mmを計る。この他未製品が1点出土している(12)。

〈石器〉 第29図 1

黒曜石製のラウンドスクレイパーが1点出土している。厚手の剝片素材と考えられ背面に自然面が残っている。刃部は比較的急角度の調整が加えられ、縁辺には細かなツブレが認められる。



第27図 石製模造品実測図



第28図 石製品実測図（砥石・使用痕・加工痕のある礫）

〈砥石〉 第28図1～2

確実なものが2点ある。1は泥岩を素材としたもので大部分が破損している。2は砂岩を素材とし扁平なものである。いずれにも磨痕、擦痕、線状痕の使用痕が観察された。これらは石の目が比較的細かいもので仕上砥～中砥として使用されたものと考えられる。

〈使用痕・加工痕のある礫〉

比較的大形の礫を素材とし、この表面に磨痕、擦痕、溝状痕（線状痕）、敲打痕、くぼみなどの使用痕・加工痕のあるものの一括してまとめた。14点出土している（第28図3～16）。石質は砂岩・安山岩が多い。この内14～15は形態、溝状痕（線状痕）の特徴から砥石（荒砥）と考えられる。また8については縄文時代の凹石と類似しており、この時代のものの可能性がある。その他については今後完形品の出土をまって用途や機能について検討したい。

4. 縄文・弥生土器

基本層位第Ⅱ層および道路側溝跡埋土から出土している。

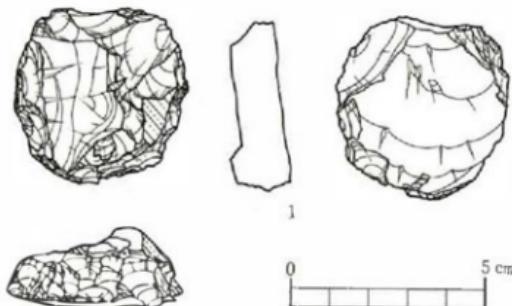
縄文土器： 第30図1～14までのもので、中期後葉のものと、晩期大洞A式に相当するものがある。

弥生土器： 第30図15～22までのもので、寺下圓式～樹形圓式にかけてのものである。

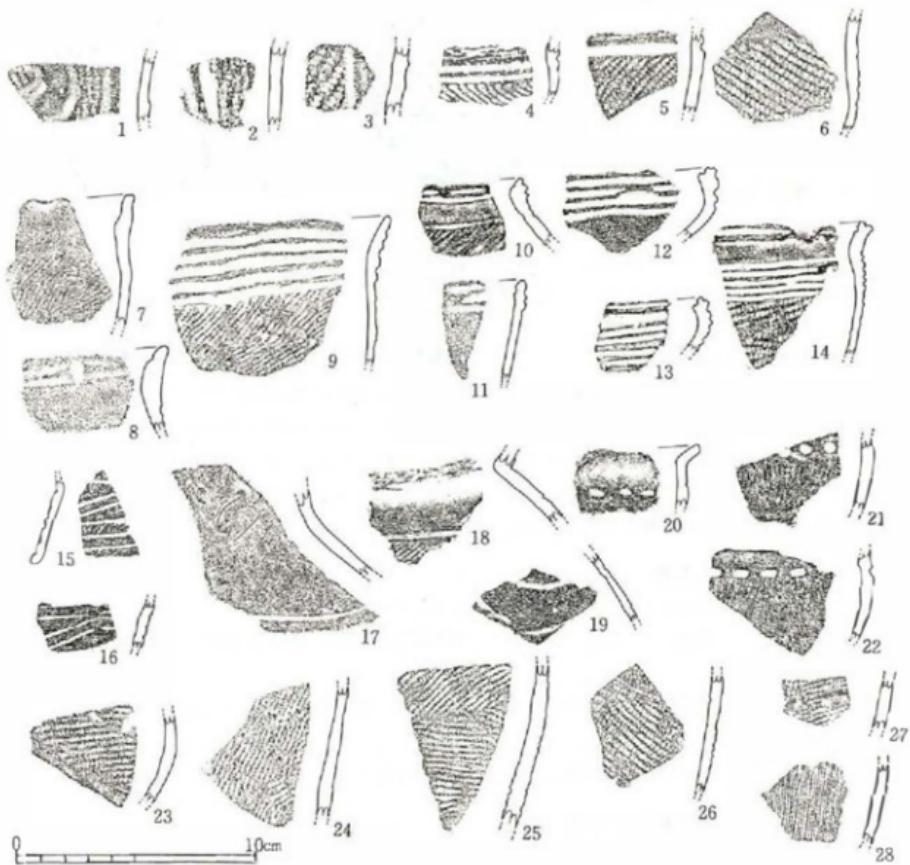
その他に地文のみのものがある（第30図23～28）。これらについてはいずれかの時代に伴うものであるが、28に関しては特徴的な撫系文より弥生時代のものである。

5. 中世以降の遺構と遺物

ここで扱う中世以降の遺構とは、不整楕円、楕円、方形、溝状の形を呈する土塹で、埋土が黄褐色砂（第Ⅱ層）と黄灰色粘土ブロックが混じり合う土で人為的に埋め戻されたものを指している。断面形はほぼ逆台形状を呈するものが大半を占めるが、中には舟底状のものもある。深さは0.4m～0.7mを計る。他の遺構との重複関係では、SK 461～463がSD 467に切られている他はすべての遺構（古代）を切って構築している。底面上から検出される遺物はなく、時期を決定する決め手に欠けるが、埋土中からは古代の土器破片の他、SK 438から陶器片、SK 455から磁器片、SK 464から常滑産の甕（近世）が出土している。また、第4次調査区でも同様な土塹を検出しておらず、中世の板草履が出土している。これらのことから、本遺構については大まかに中世～近代の幅広い年代を考えておきたい。性格についてはこれまでの資料のみでは詳しく言及できないが、掘削されてから比較的短期間で埋め戻されているものと見られる。これらの概要については第7表に示した。



第29図 石器(ラウンドスクレイバー)実測図



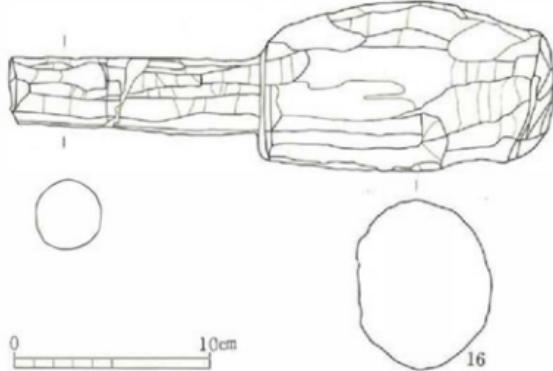
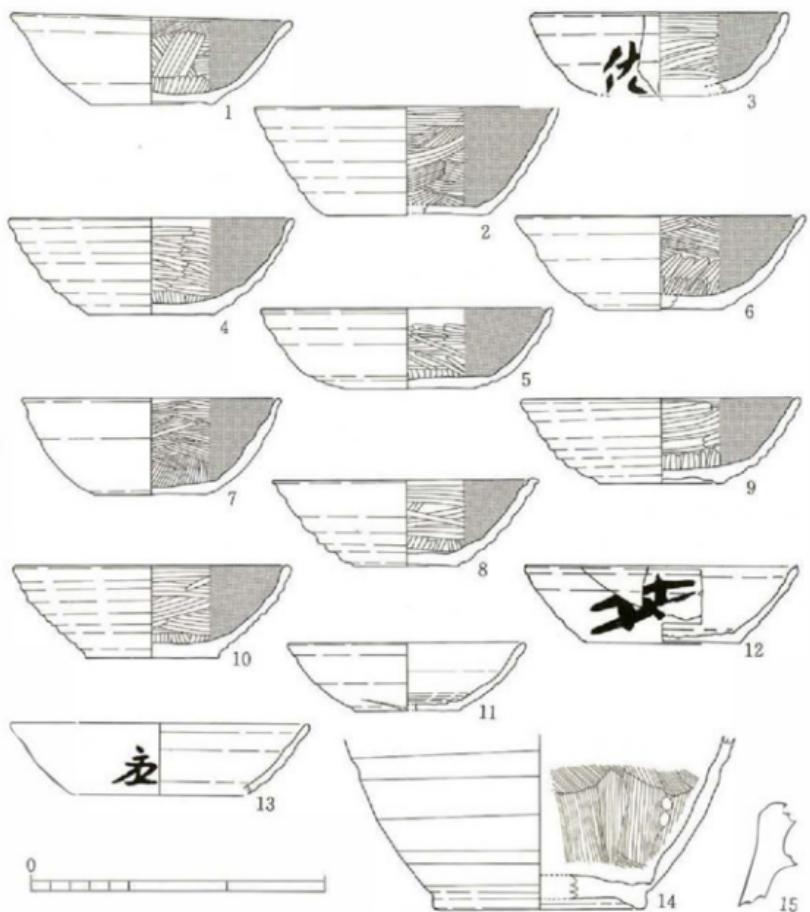
第30図 繩文・漢生土器

V ま と め

今回の発掘調査では、古墳時代と平安時代の遺構、及び縄文時代～江戸時代の遺物を検出した。ここでは古墳時代の木組み遺構と平安時代の道路跡を中心に若干のまとめをしておきたい。

—古墳時代—

当初、地山と考えていた第Ⅱ層に土師器がめり込んでいたことから発した古墳時代の発掘調査は、予想もしなかった木組み遺構の発見により大きな成果を納めることができた。この



第31図 中世以降の土塙出土遺物実測図

木組み造構を覗っていた砂層（第Ⅱ層）は、その堆積のあり方から河川の氾濫等により供給されたものと考えられる。また、調査区の制限からどのような分布域をもつものなのか明らかにし得なかつたが、かなり規模の大きい河川の堆積層ということは言えようか。そして木組み造構は河川の中に造られた構築物としてとらえることができる。この河川の存在を裏付けるかどうか確信は得られなかつたが、西側に隣接する第4次調査区の東端付近で地山が東方へ落ちていくことが確認されている。

さて、この木組み造構が河川中に存在した場合、如何なる性格を有するものであろうか。若干検討してみたい。このような立杭・横木・斜材からなる構築物が河川中に存在した場合、まず考えられるのは堰であろう。これまでの弥生・古墳時代の発掘調査例（註4）を参考にしてみると、基本的な構造が山王遺跡の例と良く似ているのがわかる。さらにイネ科植物や枝材を敷き詰める例は大阪府池島遺跡、山賀遺跡、利倉遺跡、福岡県那珂君体遺跡等で知られている。これらの類似例から山王遺跡・木組みの造構の性格は堰とするのが妥当ではなかろうか。ただし、福岡県鶴町遺跡の堤防状造構と称するものに本木組み造構のG列～J列が構造的に類似しており、このような性格も考慮する必要はあろう。

なお、木組み造構を構成する部材毎の樹種は次のようになる。立杭：クヌギ7点、ハンノキ1点、横木：クヌギ4点、トリネコ類1点、斜材：トチノキ10点、サクラ4点、ヌルデ1点、モミ1点、建築材（横木）：クリ1点、流木：ニレノキ1点。立杭・横木はクヌギを中心に、斜材はトチノキ、サクラを中心に選択されていることがわかる。

-古代-

道路跡に先行する遺物包含層（C～D層）の土器についてまず検討する。この層から出土している土器には前述したとおり土師器・須恵器がある。土師器杯の特徴としては、すべてロクロ未使用で外面の体部に緩い段や、沈線的な段が付くものと、底部から内湾気味に立ち上がりそのままに口縁に至るものとがある。底部は丸底で内面はヘラミガキ→黒色処理が施されている。甕もロクロ未使用のものである。須恵器は底部がヘラ切り→ヘラケズリ調整のものと、全面回転ヘラケズリ調整のものとがある。これらの特徴を有する土器群は多賀城跡のA群土器（註5）の様相に類似する。A群土器の年代については8世紀代と考えられており、当該土器群についてもほぼこの頃とみておきたい。B層土器群については、層位的にC～D層土器群より新しいものとできるが、出土量が少ないため詳述はできない。しかしロクロ未使用の土師器を含むことから多賀城跡のB群土器に比定できるかもしれない。

次に道路側溝跡出土土器について検討する。道路側溝跡出土土器については、側溝跡の変遷のあり方から4期に分けられ、古い順にA～D期とたどれることが判明している。一番古いA期出土土器の特徴としては、土師器杯にはロクロ未使用のものとロクロ使用のものとがあり前者がわずかで後者が大半を占める。底部は回転糸切り無調整のものがあるが、回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリ調整を加えたものが多い。須恵器杯は口径に対する底径の割合が大きいもので、底部がヘラ切り無調整のものが多く、糸切りのものでも回転ヘラケズリなどの再調整が

加えられている。なお、赤焼き土器は含まれていない。A期土器群については多賀城跡のC-D群土器の様相を合わせてもつものであるが、須恵器杯などの特徴はC群土器に近いであろう。年代についてはC群が9世紀前半、D群が9世紀後半頃と考えられており本A期土器群もほぼこの頃に比定しておきたい。C・D期土器群は杯に限ってみれば土師器・赤焼き土器が主体を成すもので、須恵器の割合が非常に少ないと言える。土師器杯の特徴としては底部切り離しが回転糸切りで無調整のものが多く、他の切り離し技法は少ない。赤焼き土器杯（註6）は法量的には比較的大型のものから小型のものまである。小型の杯は口径10cm前後のものもあり、多賀城跡のF群土器の小型杯に類似するものであるが、高台小型杯は含まれていない。本C・D土器群は灰白色火山灰との関係、あるいは土器の様相から多賀城跡のE・F群土器の段階に相当するものとみられる。F群土器には、10世紀中頃の年代が与えられている。ただし、多賀城外のF群土器相当土器群の存続期間が多賀城内のそれと同一かどうかかも今後検討せねばならないであろう。以上の検討により今回検出した道路跡の存続期間については、おおむね9世紀～10世紀中頃としておきたい。

S X 382 東西道路跡とS X 468 南北道路跡の交わる付近は周辺より一段低い地形であり、そこに遺物包含層が形成されていた。さらにその周辺に整地盛土し道路面を構築している状況が確かめられた。

東西道路の方向は、第4次調査で検出したS X 200 東西道路跡と今回検出したS X 382 東西道路跡の2点間、約116mの間で求められる方向はE-8°37'-Sである。この方位は多賀城跡外郭南辺築地の方向（E-7°~8°-S）とほぼ一致するものであり、築地の方位を範とした可能性を指摘できよう。なお、南辺築地との推定平行距離は約540m（約5町）である。

今回検出した道路跡の他に多賀城周辺では、西から新田遺跡（註7）、山王遺跡・仙塙道路関連調査（註8）、市川橋遺跡（註9）、多賀城跡第37次調査（註10）、で確認されている。これらの成果によると、年代的にはおおむね平安時代、方位的には多賀城跡政庁中軸線に平行するものと、多賀城跡外郭南辺築地に平行するものがある。路幅については、3～5mのものと11～13mのものとがあり、前者は南北道路、後者は東西道路にみられる。ただし山王遺跡・仙塙道路関連八幡地区検出の東西道路については後者である。次にこれら道路跡の位置関係についてみると、現段階では、道路跡の検出例が限られており、連続性を実証できるものはほとんどない。しかし、例えば、本地区検出の東西道路と仙塙道路関連八幡地区的東西道路との距離は約2町あり、1町を単位とした地割りが行われていた可能性は高いと考えられる。

次に本地区で検出した遺構（掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡）と道路跡の関係について述べる。掘立柱建物跡はS X 468 南北道路跡の東側で検出した。方位は、N-1°~3°-Eの間にすべて納まり、多賀城跡中軸線の方位に近いと言える。年代は出土遺物が勤少であるため詳しく述べられないが、S B 390 A・Bより内面黒色処理を施したロクロ未使用的土師器杯・甕の破片が出土している。これらの出土遺物は奈良時代（多賀城跡・A群土器）の特徴を持つものである。他の建物跡については、方位的には一致は見るものの、年代の特定はできず、S B 390 A・Bとの同時性についても確実とは言えない。道路跡との位置関係からみると、S D 387 C 備溝

跡に接続するSD 417は区画溝と考えられ、建物跡はその北側一帯に分布している。このことは建物跡がSD 417区画溝に規制を受けたものとも推察できる。以上のことから本地區検出の掘主柱建物跡と道路跡のセット関係は年代と方位からみるとそれが生じているが、位置関係からすると肯定できる面もありいずれとも判断が下し難い。

井戸跡から出土した土師器の杯類は、すべて製作にロクロ使用したもので、底部の切り離しが回転糸切りのものである。そしてこれに赤焼き土器杯・高台小型杯が加わる構成を成している。これらの土器の特徴は多賀城跡のE・F群土器対比される。したがって本道路跡のC・D期に機能していたものとされよう。

溝跡はSD 399、SD 412～SD 414について検討する。これらの溝跡はSD 384南側溝跡の南側に並行して走っており、SD 399には側溝跡と同様に灰白色火山灰層を介して4期の変遷が認められた。この溝跡については道路南側に展開する屋敷等を区割りする溝の一部とみておきたい。

今回の調査では以上のような成果が得られ、国府多賀城によって規制を受けた地域として、さらに認識を深める資料を提供することとなった。今後は今回あまり触れられなかった多賀城周辺の地割りの問題を含めて総合的に検討していく必要があろう。

（註）

- 註1 この植物遺体の同定については東北大学農学部星川清親氏に御教示を得た。
- 註2 多賀城市教育委員会『山王・高崎遺跡発掘調査概報』多賀城市文化財調査報告書第2集（1981）
- 註3 この件については渡辺泰伸氏（仙台育英学園高等学校）の御教示を得た。
- 註4 島田義明・柳本照男『利倉遺跡』（1976）
古照遺跡調査団編『古照遺跡』松山市文化財調査報告書IV（1974）
- 大阪府教育委員会『池島遺跡試掘調査概要・I』（1982）
- 杉本二郎他『山賀（その1）』大阪文化財センター（1983）
- 石神 祐治『府道松原糸大津輪間連遺跡発掘調査報告書I』大阪文化財センター（1984）
- 力武卓治他『鶴町遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集（1976）
- 福岡市教育委員会『郡河深 タサ遺跡I』福岡市埋蔵文化財調査報告書第72集（1981）
- 福岡市教育委員会『郡河深 タサ遺跡II』福岡市埋蔵文化財調査報告書第82集（1982）
- 福岡市教育委員会『郡河久平遺跡II』福岡市埋蔵文化財調査報告書第163集（1987）
- 福岡市教育委員会『郡河君体遺跡Ⅴ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第208集（1989）
- 註5 白鳥良一『多賀城跡出土土器の変遷』宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要』（1980）
宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡・政庁跡本文編』（1982）
- 註6 多賀城跡・政庁跡本文編によれば須恵系土器は10世紀以降に出現すると考えられている。本報告書で赤焼き土器としたものは、細部で若干の違いはあるが、この須恵系土器と同様のものとみている。
- 註7 多賀城市埋蔵文化財調査センター『新田遺跡第11次調査・現地説明会資料』（1989）
- 註8 鈴木嘉一郎『山王遺跡・市川橋遺跡の発掘調査について』昭和63年度宮城県内発掘調査成果発表会要旨（1988）
赤沢靖章他『山王遺跡（八幡地区）』平成元年度宮城県内発掘調査成果発表要旨（1989）
- 註9 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第4集（1983）
- 註10 白鳥良一『第37次発掘調査－多賀城跡－』宮城県多賀城跡調査研究所年報1980（1981）

第2表 古墳時代土器観察表

遺跡名	種類	基盤	ディレット	外面調査	内面調査	残存	口径	底径	高さ	備考	参考文献
第2回1 土師器	高	杯	D-8	斜面:ハコナデ・ボタ	斜面:ハコナデ・ボタ	16.4				9-1	
第2回2 土師器	灰	杯	B-9	斜面:ハコナデ・ヘラミガタ	斜面:ハコナデ・ボタ	14.2				9-2	
第2回3 土師器	高	台	D-10	斜面:ヘラミガタ	斜面:ヘラミガタ	17.8					
第2回4 土師器	高	杯	B-9	セカリ・ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラミガタ	14.8		14.8		9-3	
第2回5 土師器	高	杯	B-9	セカリ・ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラミガタ	3.4	14.8	3.2	6.3	9-4	
第2回6 土師器	杯		D-12	セカリ・ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラミガタ	2.5	14.6		(6.2)	9-5	
第2回7 土師器	杯		B-9	セカリ・ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラミガタ	3.4	13.0		9.5	9-6	
第2回8 土師器	杯		B-9	ヨコナデ・ヘラミガタ	ヨコナデ・ヘラミガタ	14.8		8.5		9-7	
第2回9 土師器	高			ヨコナデ・ヘラミガタ	ヨコナデ・ヘラミガタ	12.0				9-8	
第2回10 土師器	高		G-11	ヨコナデ・ヘラミガタ	ヘラミガタ	12.4				9-9	
第2回11 土師器	高			ヨコナデ・ヘラミガタ	ヨコナデ・ヘラミガタ	18.8				9-10	
第2回12 土師器	高		F-11	ヨコナデ・ヘラミガタ・ヘラミガタ	ヨコナデ・ヘラミガタ	7.7	3.8	8.6		9-11	
第2回13 土師器	高		B-5	ヨコナデ・ヘラミガタ	ヨコナデ・ヘラミガタ・ヘラミガタ	1.2	17.4			9-12	
第2回14 土師器	杯		B-18	ヨコナデ・ヘラミガタ・ヘラミガタ	ヘラミガタ・ヘラミガタ	1.5	11.0		(6.0)		

第3表 道路側溝跡A期出土遺物観察表

遺跡名	種類	基盤	調査場所	外面調査	内面調査	残存	口径	底径	高さ	備考	参考文献
調査場6 土師器	杯	S D-341	メリカリ・斜面:ヨコナデ・ヘラミガタ	ヘラミガタ・褐色處理	1.2	(16.0)	16.0	(3.5)			
調査場7 土師器	杯	S D-341	ヨコナデ・褐色處理	ヘラミガタ・褐色處理	1.5	(13.8)	16.0	(4.3)			
調査場8 土師器	杯	S D-347	ヨコナデ・低周波焼成	ヘラミガタ・褐色處理	1.4	13.5	6.2	4.1	調査場6と組合せて土石	10-1	
調査場9 土師器	杯	S D-348	ヨコナデ・低周波焼成	ヨコナデ・褐色處理	1.2	13.2	7.0	3.5		10-10	
調査場10 土師器	杯	S D-349	ヨコナデ・低周波焼成	ヨコナデ	12.6	7.3	3.9			10-9	
調査場11 土師器	杯	S D-350	ヨコナデ・低周波焼成	ヨコナデ	12.6	7.3	3.9			10-10	
調査場12 土師器	高	S D-351	ヨコナデ・低周波焼成	ヨコナデ	17.8	6.9	3.7	10-5			
調査場13 土師器	高	S D-352	ヨコナデ・低周波焼成	ヨコナデ	1.4				つまみ出しが付く	10-12	
調査場14 土師器	高	S D-353	ヨコナデ・低周波焼成	ヨコナデ	1.5	14.2				10-13	

第4表 道路測溝跡C・D期出土遺物観察表

遺跡名	種類	基盤	調査場所	外面調査	内面調査	残存	口径	底径	高さ	備考	参考文献
平野場1 土師器	杯	S D-341	ヨコナデ・低周波焼成	ヘラミガタ・褐色處理	1.4	14.4	6.4	(4.3)	Ⅰ類		
平野場2 土師器	杯	S D-347	ヨコナデ・低周波焼成	ヘラミガタ	3.5	13.6	5.4	4.0	Ⅰ類		
平野場3 土師器	杯	S D-347	ヨコナデ・低周波焼成	ヘラミガタ・褐色處理	1.4	14.5	6.0	4.0	Ⅰ類		
平野場4 土師器	高	S D-348	ヨコナデ・低周波焼成	ヘラミガタ・褐色處理	12.8	6.9	3.7	10-5		10-1	
平野場5 土師器	杯	S D-349	ヨコナデ・低周波焼成	ヘラミガタ・褐色處理	1.5	14.6	6.2	4.2	Ⅰ類		
平野場6 土師器	杯	S D-344	ヨコナデ・低周波焼成	褐色處理	1.2	14.6	5.6	4.4	Ⅰ類		
平野場7 土師器	杯	S D-347	ヨコナデ・低周波焼成	ヘラミガタ・褐色處理	1.3	14.4	6.0	4.4	Ⅰ類		
平野場8 土師器	高	S D-348	ヨコナデ・低周波焼成	ヘラミガタ・褐色處理	1.4	13.6	6.0	4.0	Ⅰ類		
平野場9 土師器	杯	S D-346	ヨコナデ・低周波焼成	褐色處理	1.5	13.8	4.4	3.7	Ⅱ類		
平野場10 土師器	杯	S D-347	ヨコナデ・低周波焼成	褐色處理	2.5	13.4	4.8	4.0	Ⅱ類		
平野場11 土師器	杯	S D-348	ヨコナデ・低周波焼成	褐色處理	3.5	15.0	6.0	4.6	Ⅱ類		10-3
平野場12 土師器	杯	S D-349	ヨコナデ・低周波焼成	褐色處理	1.6	(12.0)	5.2	4.0	Ⅱ類		10-2
平野場13 土師器	杯	S D-343	ヨコナデ・低周波焼成	褐色處理	2.5	15.0	5.2	4.0	Ⅱ類		
平野場14 土師器	高	S D-344	ヨコナデ・低周波焼成	褐色處理	1.4	14.4	6.4	5.2	Ⅱ類		
平野場15 土師器	高	S D-347	ヨコナデ・低周波焼成	褐色處理	1.2	15.0	6.1	5.5	Ⅱ類		
平野場16 土師器	杯	S D-347	ヨコナデ・低周波焼成	褐色處理	3.5	14.8	5.9	5.0	Ⅱ類		

国名	種別	品種	選育地	外観鑑定	内観鑑定	性状	口付	脚形	花色	備考	参考文献
第127977	土曜日	林	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ヘラミガキ	はま御影	15.6	6.4	5.3	内側黒縁輪郭線に「十」の ヘリテイジ	10-4
第127988	土曜日	林	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ヘラミガキ→頭部整理	3/4	15.7	7.8	5.9	Eb M	10-5
第127999	土曜日	林	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ヘラミガキ→頭部整理	1/2	15.6	6.4	5.3	Eb M	10-6
第130000	土曜日	林	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ヘラミガキ→頭部整理	1/2	(15.8)	16.0	5.0	Eb M	10-6
第130011	土曜日	林	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ヘラミガキ→頭部整理	1/2	15.7	7.8	5.9	Eb M	10-5
第130022	土曜日	高台林	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ヘラミガキ→頭部整理	1/2	15.7	7.8	5.9	Eb M	10-5
第130033	土曜日	林	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ヘラミガキ→頭部整理	1/2	15.7	7.8	5.9	Eb M	10-5
第130044	土曜日	林	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ヘラミガキ→頭部整理	1/2	15.7	7.8	5.9	Eb M	10-5
第130055	土曜日	林	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ヘラミガキ→頭部整理	1/2	15.7	7.8	5.9	Eb M	10-5
第130066	土曜日	高台16	S D -367 F -2	ロフロナデ。頭部輪廓線	ヘラミガキ→頭部整理	1/2	14.0	—	—	高台16.6	10-7
第130077	土曜日	高台16	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ヘラミガキ→頭部整理	1/2	15.9	6.2	5.5	—	10-7
第130088	清透	透	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	口輪 黄緑	13.2	—	—	—	—
第140011	赤提さと	林	S D -367 F -4	セキナミ山脚輪郭線不明	ロフロナデ	1/4	(10.6)	(4.0)	(2.0)	Is M	11-3
第140022	赤提さと	林	S D -367 F -4	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	1/2	10.4	5.1	2.4	Is M	11-3
第140033	赤提さと	林	S D -367 F -4	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	3/5	11.0	4.6	2.8	Is M	11-1
第140044	赤提さと	林	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	1/4	(12.4)	4.2	(3.7)	Is M	11-1
第140055	赤提さと	林	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	実 紫	11.0	4.7	3.1	Is M	11-3
第140066	赤提さと	林	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	3/4	11.6	4.8	3.3	Is M	11-2
第140077	赤提さと	林	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	实 紫	11.6	5.0	3.5	Is M	11-4
第140088	赤提さと	林	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	3/5	12.2	5.2	3.3	Is M	11-6
第140099	赤提さと	林	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	实 紫	11.2	5.0	3.2	Is M	11-5
第140100	赤提さと	林	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	1/3	12.0	5.0	(3.0)	Is M	11-7
第140111	赤提さと	林	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	1/3	(12.4)	(4.0)	(3.0)	Is M	11-9
第140122	赤提さと	林	S D -367 F -4	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	实 紫	12.5	4.7	3.1	Is M	11-8
第140133	赤提さと	林	S D -367 F -4	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	实 紫	12.4	5.0	3.7	Is M	11-10
第140144	赤提さと	林	S D -367 F -4	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	赤紫(5-6 色輪郭)	12.4	3.9	3.6	Is M	11-12
第140155	赤提さと	林	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	实 紫	12.6	4.8	3.8	Is M	11-11
第140166	赤提さと	林	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	1/2	13.7	5.2	4.4	Is M	11-13
第140177	赤提さと	林	S D -367 F -4	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	1/2	(14.0)	5.2	4.1	Is M	11-1
第140188	赤提さと	林	S D -367 F -4	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	1/2	(14.0)	(5.2)	(3.8)	Is M	11-1
第140199	赤提さと	林	S D -367 F -4	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	1/4	(13.2)	(4.4)	(4.2)	Is M	11-1
第140200	赤提さと	林	S D -367 F -4	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	1/5	(14.2)	4.5	(4.3)	Is M	11-1
第140211	赤提さと	林	S D -367 F -4	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	1/2	12.4	5.0	4.0	Is M	11-13
第140222	赤提さと	林	S D -367 F -4	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	2/5	(15.4)	(6.2)	(4.9)	Is M	11-15
第140233	赤提さと	林	S D -367 F -4	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	2/5	(19.0)	(7.4)	(7.2)	Is M	11-14
第140244	赤提さと	高台16	S D -367 F -4	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	1/3	(15.2)	8.2	5.5	—	—
第140255	赤提さと	高台16	S D -367 F -2	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	1/2	(15.4)	—	—	高台17.5	11-16
第140266	赤提さと	高台16	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	1/5	(18.6)	—	—	赤提さと17.6	—
第140277	赤提さと	高台16	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	实 紫	15.8	6.0	—	高台16.8	11-17
第140288	赤提さと	高台16	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	机 紫	—	—	—	赤提さと17.4 高台16.8	—
第140299	赤提さと	高台16	S D -367 F -1	ロフロナデ。頭部輪廓線	ロフロナデ	机 紫	—	—	—	赤提さと17.6 高台16.8	—
第150300	赤點品	蟹	S X -367 F -1	ロフロナデ。テカリ	ロフロナデ	赤太郎	16.0	(18.4)	1.4	—	13-7
第150311	赤點品	蟹	S X -367 F -1	ロフロナデ。テカリ	ロフロナデ	赤根太郎	16.0	(18.0)	—	—	13-8
第150322	赤點品	蟹	S X -367 F -1	ロフロナデ。テカリ	ロフロナデ	赤根太郎	16.0	(18.0)	—	—	13-1
第150333	赤點品	蟹	S X -367 F -1	ロフロナデ。テカリ	ロフロナデ	赤根太郎	16.0	(18.4)	—	—	13-1
第150344	赤點品	蟹	S X -367 F -1	ロフロナデ。テカリ	ロフロナデ	赤根太郎	16.0	(18.4)	—	—	13-1

第7表 中世以降の遺構と遺物の概要

遺構名	地 誌	重複關係	平 面 形	長軸×短軸×深さ(m)	遺 物
SK435	C - D - 2 - 3	なし	不整円	3.64×2.4×0.52	土師器皿
SK436	D - E - 4	*	調 状	5.5×1.38×0.4	土師器皿・甕、須恵器
SK437	E - 5	*	不整円	2.6×1.28×0.26	なし
SK438	E - 8	*	不整円	1.14×0.94×0.45	陶器
SK439	A - B - 5	*	楕 円	1.75×1.35×0.71	土師器皿・甕、須恵器・甕、丸瓦
SK440	き - 9 - 10	*	円	1.0×1.0×0.1	土師器皿(第3281)・甕
SK441	J - K - 10	*	方形?	5.18×(2.52)×0.5	縦文土器、土師器皿・甕
SK442	H - I - 7 - 8	S D 383→S K 442	楕 円	2.25×1.44×0.9	土師器皿・甕、須恵器
SK443	C - 5	なし	*	1.04×0.9×0.44	土師器皿・甕、須恵器
SK470	D - E - 0 - 1	S K 470→S D 471	方 形	3.84×2.06×0.26	なし
SK444	F - G - 14~17	S D 409 S K 445→S K 444	調 状	8.75×1.1×0.5	土師器皿・甕、須恵器・甕、赤城土器
SK445	G - H - 15 - 16	S D 409 S D 410→S K 445→S K 444	方 形	4.0×2.62×0.62	土師器皿・甕・柱付・甕、須恵器・甕、平瓦
SK446	H - I - 15~16	S K 430→S D 408 S D 409→S K 446	調 状	10.3×1.8×0.65	土師器皿・甕、須恵器・甕、赤城土器・甕、丸瓦
SK447	I - J - 14~16	S D 383→S K 447	馬九方形	3.28×3.18×0.49	土師器皿・甕、須恵器・甕、縦文陶器・平瓦
SK448	J - K - 16	S D 383→S K 448	*	1.9×1.66×0.5	なし
SK449	K - L - 17	なし	方 形	4.1×2.38	—— 平プラン確認のみ
SK450	L - M - 17 - 18	*	楕 円	1.76×1.08×0.43	土師器皿、須恵器
SK451	L - 19	*	方 形	1.14×0.82×0.36	土師器皿・甕
SK452	M - 19	*	楕 円	1.7×1.24×0.68	平瓦
SK453	E - 15	*	方 形	3.1×1.76×0.75	土師器皿・甕、須恵器・甕、平瓦
SK454	E - 15 - 16	S D 409→S K 454	*	2.5×2.4×0.56	土師器皿・甕、蓋、須恵器・甕、赤城土器・甕、丸瓦
SK455	C - H - 22 - 23	なし	*	3.58×2.47×0.67	土師器皿・甕、須恵器・甕、蓋
SK456	F - G - 25	S D 398→S K 456	方 形	3.4×1.5×0.56	土師器皿・甕、須恵器・甕、蓋
SK457	C - E - 23 - 24	S K 458 S K 459→S K 457	調 状	(7.4)×1.9×0.55	土師器皿・甕、須恵器・甕・蓋、平瓦
SK458	C - D - 22 - 23	S K 458→S K 457	調状?	(3.24)×1.38×0.42	土師器皿・甕、須恵器
SK459	D - E - 22 - 23	P 54→S K 459→S K 457	方 形	2.84×(2.44)×0.58	土師器皿・甕、須恵器
SK460	J - K - 20 - 21	S D 385 S D 386→S K 460	*	5.18×2.5×0.72	土師器皿・甕、須恵器・甕、高台付 蓋・甕、蓋付?・十」、平瓦、縦文土器
SK461	N - 13 - 14	S D 384→K 461→S D 467	不 明	(2.5) (1.12)×0.4	なし
SK462	L - 14	S K 462→S D 467	*	(0.95)×(0.72)	*
SK463	K - 15 - 16	S K 463→S D 467	*	1.3×0.76×0.12	*
SK464	J - L - 12 - 13	S D 383→S K 463	調 状	8.3×(1.6)×0.65	赤城土器・平瓦、近世陶器標(常滑)
SK465	E - F - 28	なし	方形?	(1.94)×(0.8)×0.6	なし
SK466	K - L - 18	*	楕 円	1.2×0.52×0.4	*
SD467	K - N - 14~16	S D 384 - S K 462→S D 467 S K 461 - S K 463	南北 溝	全長11m以上、深80.6m	土師器皿・甕、須恵器・甕

多賀城市山王遺跡出土杭他の樹種同定

嶋倉 己三郎

多賀城市山王字東町浦47地にある古墳時代の遺跡から出土した杭他32個の樹種を調査した。試料は適当の大きさに採取され、材組織の保存状態は比較的良好であった。これから切片をつくり、ガムクロラールで封じ、簡易プレパラートとし検鏡した。

調査の結果を樹種別にまとめると次のようになつた。

モミ： 試料番号 — №21

ハンノキ： 試料番号 — №8

クリ： 試料番号 — №32

クスギ： 試料番号 — №3, 4, 5, 6, 7, 16, 19, 22, 24, 28, 30, 31

ニレノキ類： 試料番号 — №26

サクラ類： 試料番号 — №2, 11, 14, 17

スルデ？： 試料番号 — №13

トチノキ： 試料番号 — №1, 9, 10, 12, 18, 20, 23, 25, 27, 29

トネリコ類： 試料番号 — №15

最も多い樹種はクスギで、杭列の殆ど全部（№3, 4, 5, 6, 30, 31）もこれである。この材質は強固で土木用にも適し、カシノキなどの乏しい東北地方では適材を選んだことになる。ただ1点、弱い材質のハンノキの杭があるが、これは応急修理のため、手近に生えていた木を用いたのではあるまいか。その他のクスギ材は用途不明である。

次に多いトチノキは、縄文時代以降、種子は食用に、材は容器類その他に広く使用されてきた。材の加工痕から元の形が推定できたらと思う。

クリは柱材で、ほど穴付3mのものであるという。黒色変質が著しく、よい切片が作れない程硬化している。各地の遺跡からもクリの長柱や杭なども知られている。

材の構造略記

モミ *Abies firma* Sieb. et Zucc.

まつ科

仮道管と放射組織からなる針葉樹材である。放射組織の分野壁孔は小さなスギ型であり、接線壁にはジェズ状の凹凸がある。

ハンノキ *Alnus japonica* Steud.

かばのき科

散孔材、道管は中くらいの大きさで、階段穿孔。放射組織は同性で単列であるが、集合放射組織をつくっており、年輪界ではこの部分が内側へ入りこむことが多い。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

ぶな科

早材部道管の大きな環孔材、晩材部へ移ると道管は急に小さくなり、多数集まって火炎状に並ぶ。放射組織は同性で、単列ばかりである。

クスギ *Quercus acutissima* Carruth.

ぶな科

早材部道管の大きな環孔材、晩材部の小道管は円形で、単独に放射方向に並ぶ。放射組織は単列のものと、大きな広放射組織がある。

ニレ属の1種 *Ulmus* sp.

にれ科

環孔材、早材部の道管は大きく、1—2列。晩材部の小道管は多数集まって斜めまたは接線方向に並ぶ。放射組織は同性で、1—6細胞幅である。

サクラ類 *Prunus* sp.

ばら科

散孔材、やや小さな道管が単独または放射状接線状に複合して分布し、單穿孔、側壁にラセン肥厚がある。放射組織は同一異性で、1—5細胞幅である。

ヌルデ? *Rhus japonica* L.

うるし科

環孔材、早材部道管はやや大きく、多列。晩材部の終わりの部分付近では小道管が接線状か斜線状に短く連なっている。放射組織は異性で、1—4細胞幅である。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume

とちのき科

散孔材、道管は中くらいから、やや小さく、單穿孔、単独または放射方向に連接して分布する。放射組織は同性で単列、階層状の配列が著しい。

トネリコ属の1種 *Fraxinus* sp.

もくせい科

環孔材、早材部の道管はやや大きく、晩材部の小道管は厚壁で、単独または2—3複合して散在する。放射組織は同性で、1—3細胞幅である。



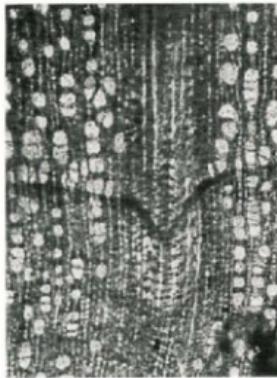
1. モミ(No.21)木口



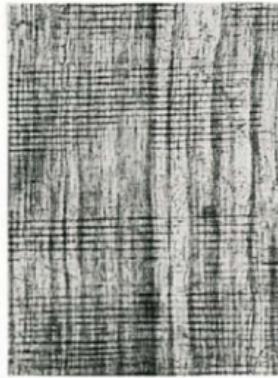
2. 同左、桿目



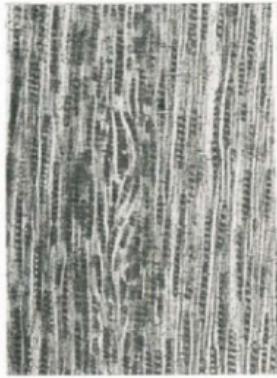
3. 同左、板目



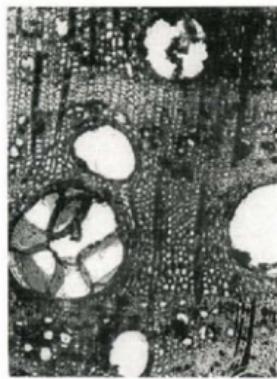
4. ハンノキ(No.8)木口



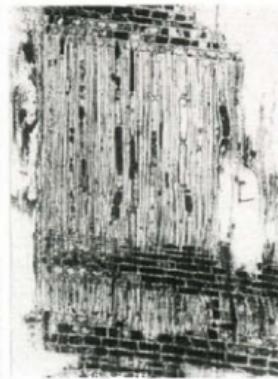
5. 同左、桿目



6. 同左、板目



7. クリ(No.32)木口



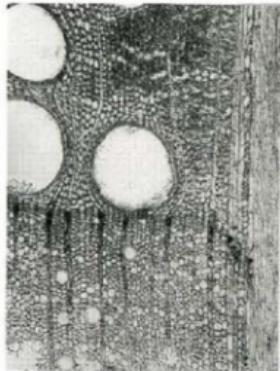
8. 同左、桿目



9. 同左、板目

山王遺跡出土坑他の顕微鏡写真(1)

2.3は×100、その他は×50



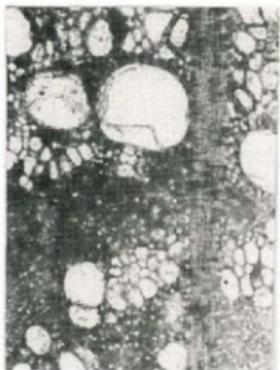
10. クヌギ(No.6)木口



11. 同左、板目



12. サクラ類(No.11)



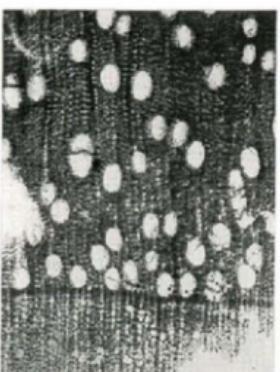
13. ニレノキ類(No.26)木口



14. 同左、板目



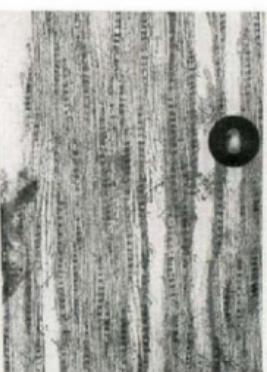
15. 同左、板目



16. トチノキ(No.27)木口



17. 同左、板目



18. 同左、板目

山王遺跡出土坑柱の顯微鏡写真(2)

鉄滓 X 線回折測定結果

平成 2 年 3 月

川鉄リクノリサーク株式会社

総合検査・分析センター千葉事業所

X 線回折測定件名

1. 山王遺跡（鐵滓）の定性分析

2. 試料番号

- ① №1 (SD384C) ② №2 (SD383B) ③ №3 (SD384D)
④ №4 (SD387D) ⑤ №5 (SE392・掘り方埋土)

3. 測定条件

測定装置：理学電機株式会社製ガイガーフレックス (RSD-II A型)

① 使用 X 線	Co-K α (波長=1.79021Å)
② K β 線吸収フィルター	Fe
③ 管電圧・管電流	50kV・30mA
④ スキャニング・ステップ巾	0.020°
⑤ スキャニング・プリセット・タイム	0.4 sec
⑥ D. S. スリット	1"
⑦ R. S. スリット	0.3mm
⑧ S. S. スリット	1"
⑨ 検出器	シンチレーション・カウンター

4. 検索結果

同定された物質は、チャートに記入致しました。

鉄滓成分分析結果

単位：%

成分 試料名	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	TiO ₂	Al ₂ O ₃
No. 1	3.75	0.11	1.08	4.00	68.8	0.14	0.33	0.57	14.5
No. 2	55.1	0.16	43.8	29.9	12.7	0.16	2.33	0.46	2.88
No. 3	39.1	0.12	40.5	10.7	29.6	0.14	0.39	3.28	7.42
No. 4	60.3	0.11	59.3	20.2	13.1	0.05	0.68	0.18	2.62
No. 5	44.6	0.11	48.9	9.26	24.0	0.20	0.65	3.78	5.28

成分 試料名	CaO	MgO	Cr ₂ O ₃	K ₂ O	Na ₂ O	V	Cu	C	C. W
No. 1	3.18	0.90	0.02	2.37	1.50	0.007	0.027	0.088	0.36
No. 2	0.83	0.26	0.01	0.35	0.81	0.010	0.014	0.78	1.28
No. 3	2.43	0.73	0.01	1.33	0.86	0.035	0.012	0.11	1.24
No. 4	0.72	0.14	0.01	0.31	0.38	0.016	0.004	0.11	1.66
No. 5	2.54	0.77	0.01	1.00	0.77	0.065	0.010	0.65	0.55

【分析方法】 J I S 法に準じ、以下の方法とした。

T. Fe : 三塩化チタン還元一二クロム酸カリウム滴定法

M. Fe : 臭素・メタノール分解-EDTA滴定法

FeO : 二クロム酸カリウム滴定法

Fe₂O₃ : 計 算

SiO₂, MnO, P₂O₅, TiO₂
Al₂O₃, CaO, MgO, Cr₂O₃

} : ガラスビード蛍光X線分析法

K₂O, Na₂O, V, Cu : 原子吸光法

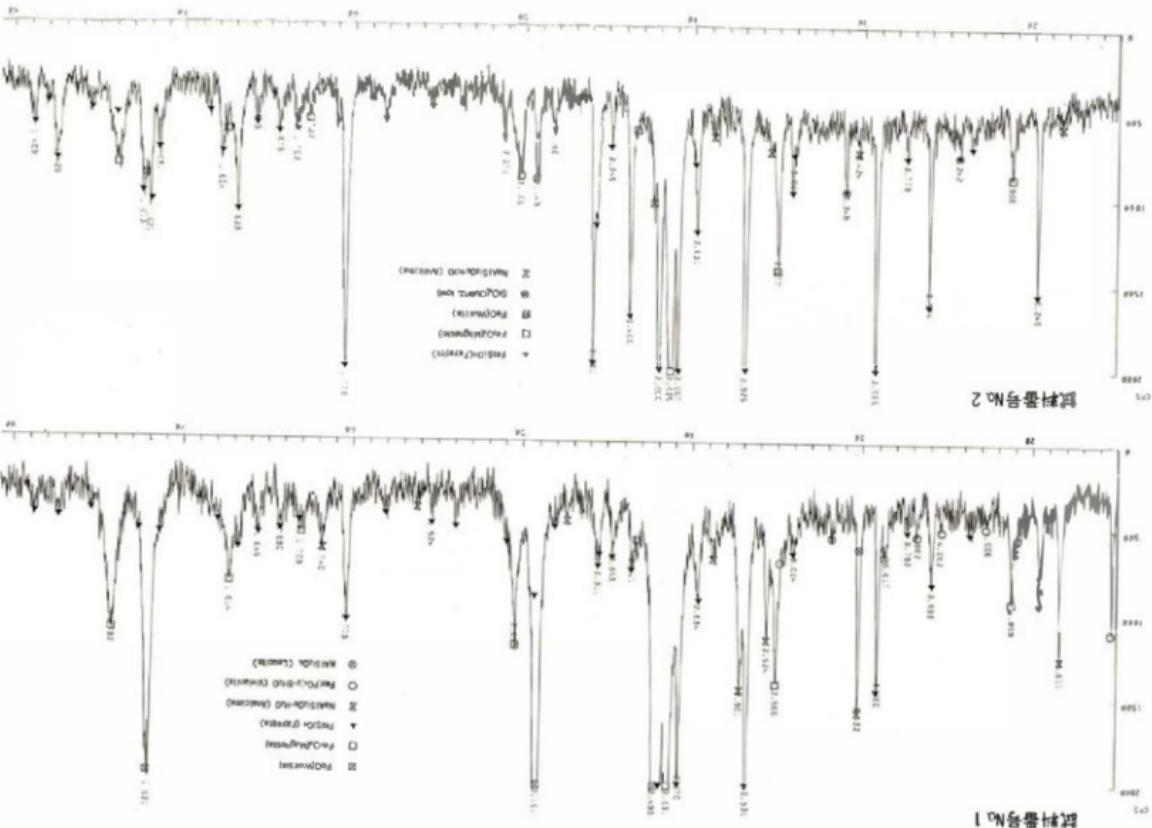
C : 燃焼-赤外線吸収法

C. W : カールフィッシャー法

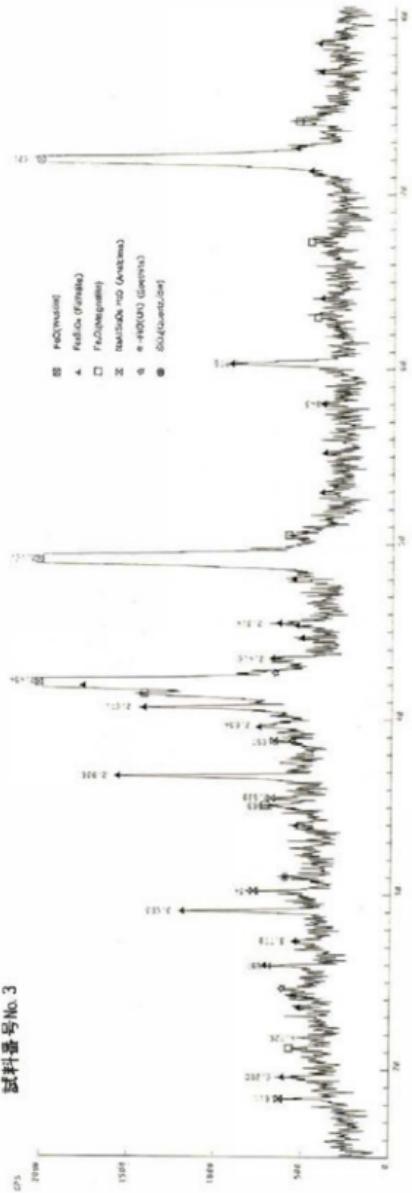
鉱物組成×線回析結果グラフ(1)

試料番号No.2

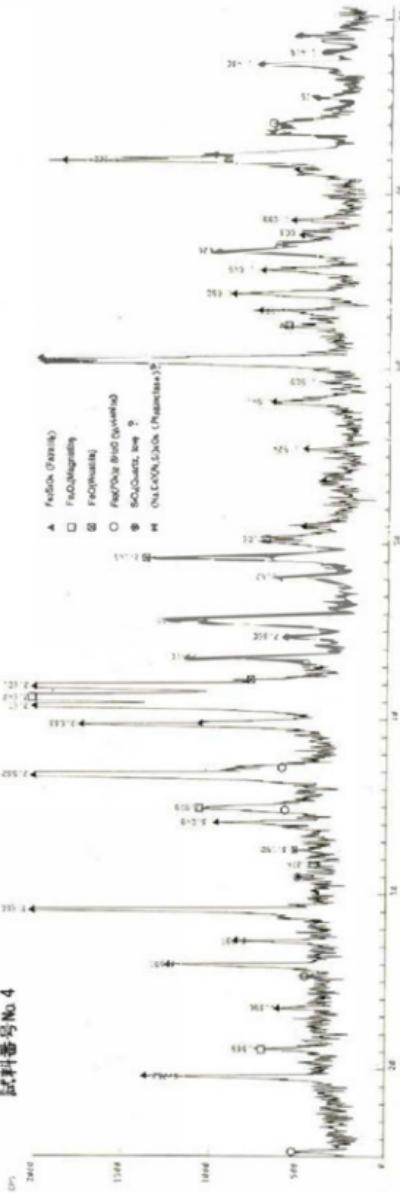
試料番号No.1



試料番号 No. 3

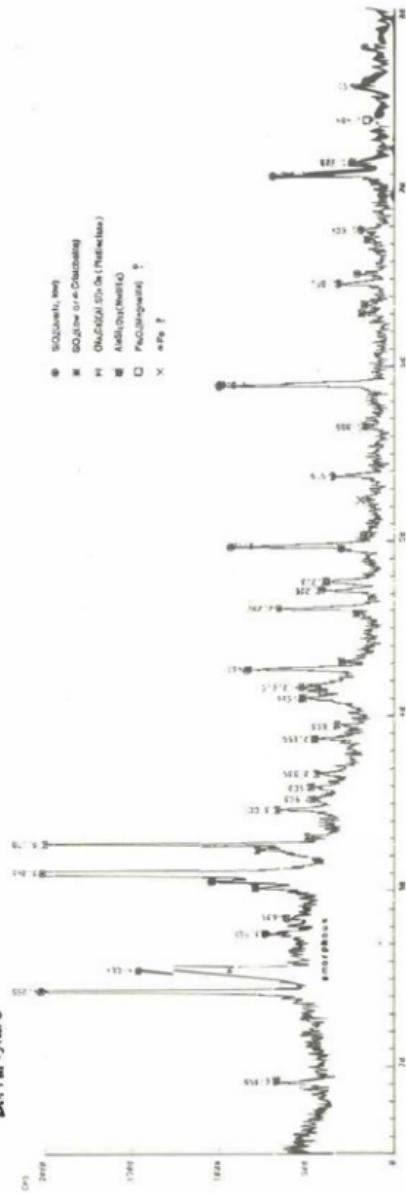


試料番号 No. 4

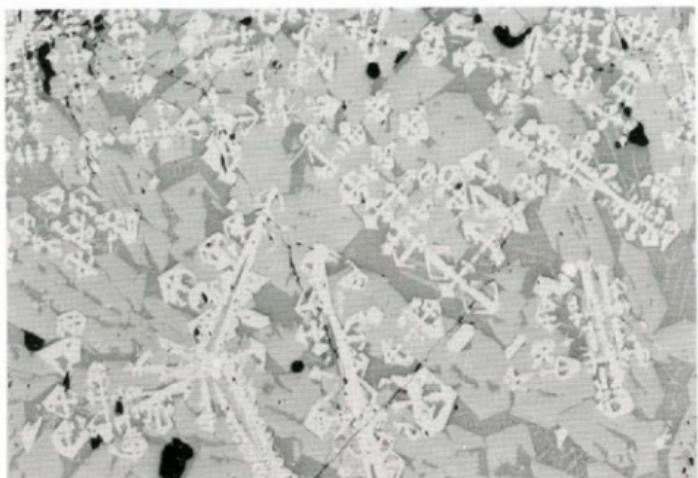


鉄滓成分 X 線回折結果グラフ(2)

試料番号No.5



鉄津成分X線回折結果グラフ(3)

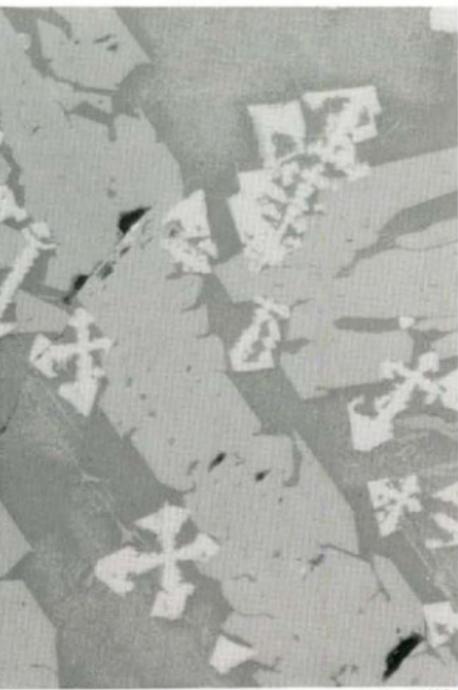


No. 1 ×100



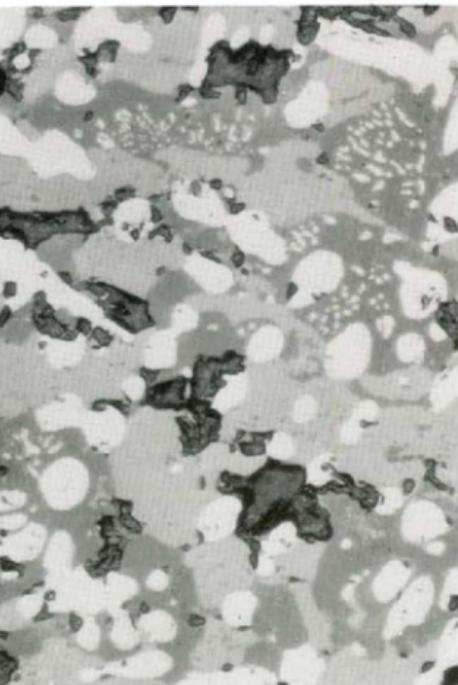
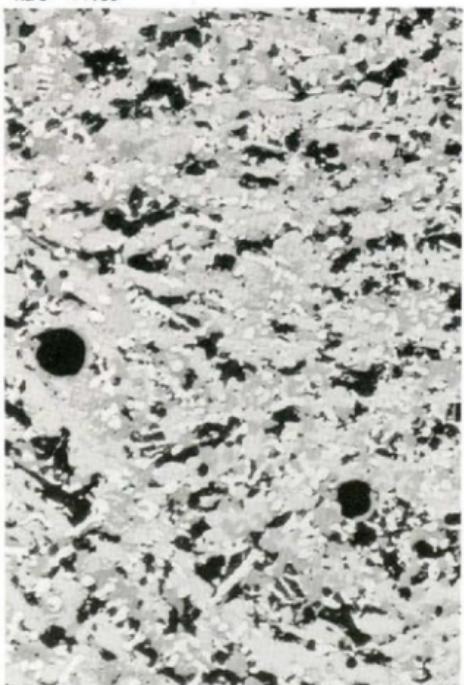
No. 1 ×400

鉄滓組織顕微鏡写真(1)



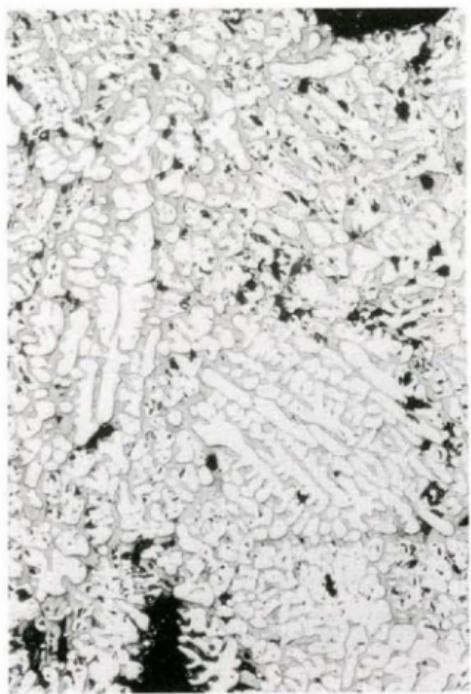
No. 3 $\times 100$

No. 3 $\times 400$



No. 2 $\times 100$

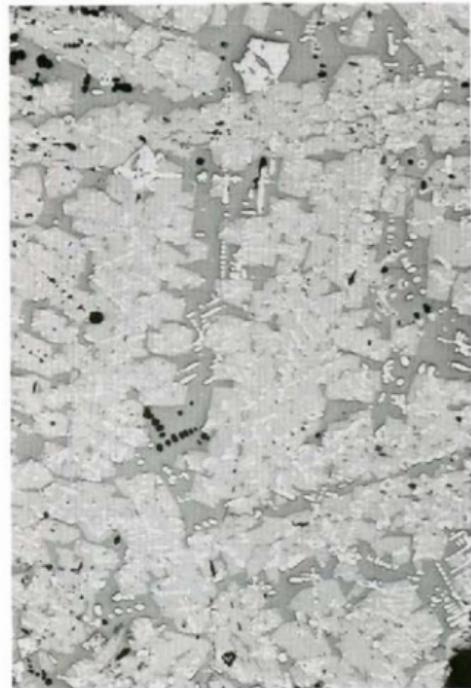
No. 2 $\times 400$



No. 5 ×100



No. 5 ×400



No. 4 ×100



No. 4 ×400



西区 SX382道路跡全景(東より)



写真図版 1

東区 全景空中写真(東より)

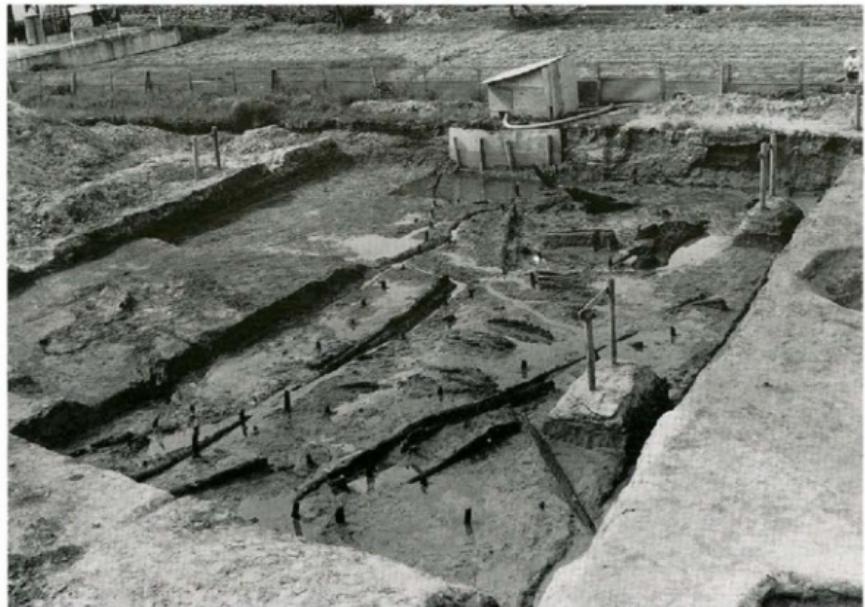


東区 SX468南北道路跡(南より)

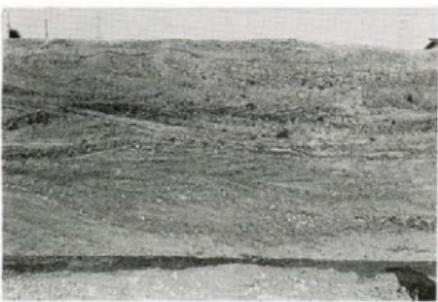


写真図版2

東区 SB388~391据立柱建物跡



SX469古墳時代木組み遺構(南東より)



写真図版 3

SX469古墳時代木組み遺構細部

土層断面

SX469木組み遺構
ヨシの茎検出状況



同 上



同 上





SE392A・B 井戸跡



日井戸側細部(東より)

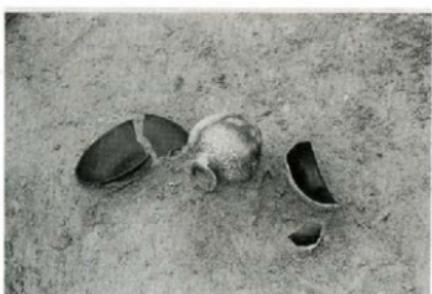


日井戸側細部(南より)



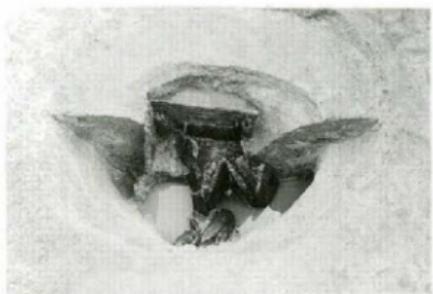
日井戸側細部(東より)

写真図版 5



A 掘り方底面遺物出土状況

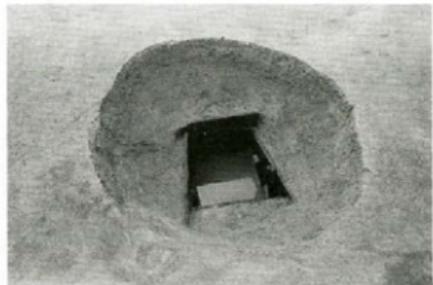
SE392A・B 井戸跡



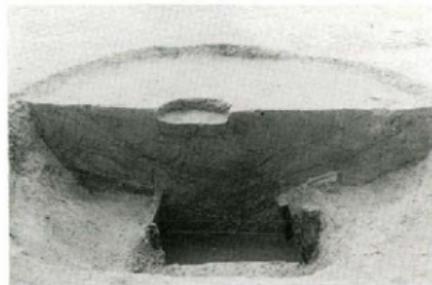
SE393井戸跡(西より)



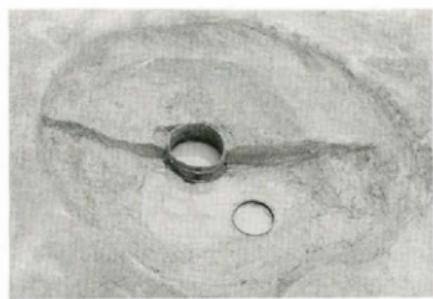
SE393井戸跡曲物検出状況



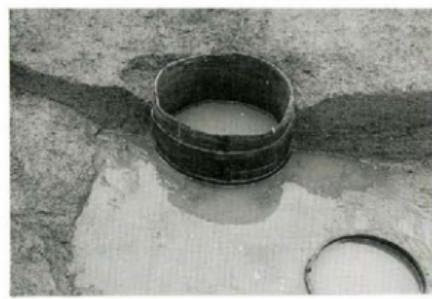
SE394井戸跡(東より)



SE394井戸跡土層堆積状況(東より)



SE395B井戸跡(南より)



SE395B井戸跡曲物検出状況



SE395A井戸跡

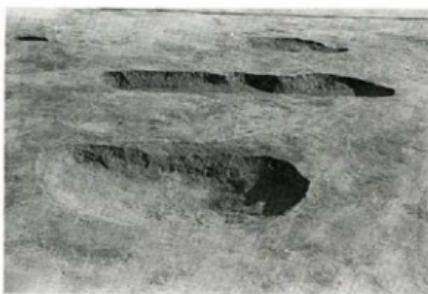
写真 図版6



SE395A井戸跡曲物検出状況



SK470土塙(南より)



SK435~437土塙(西より)



SK437土塙(南より)



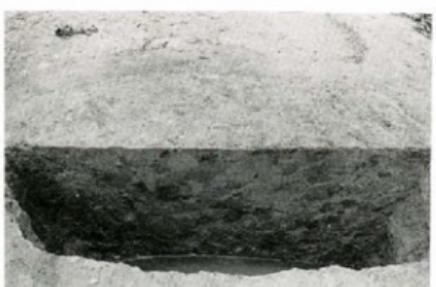
SK438土塙(南より)



SK440土塙(南より)



SK441土塙(西より)



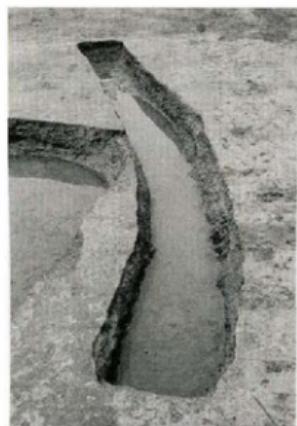
SK442土塙土層堆積状況



SK443土塙(南より)



SK427土塙(南より)



SK444土塙(東より)



SK428土塙(東より)



SK450土塙(西より)



SK455土塙(東より)

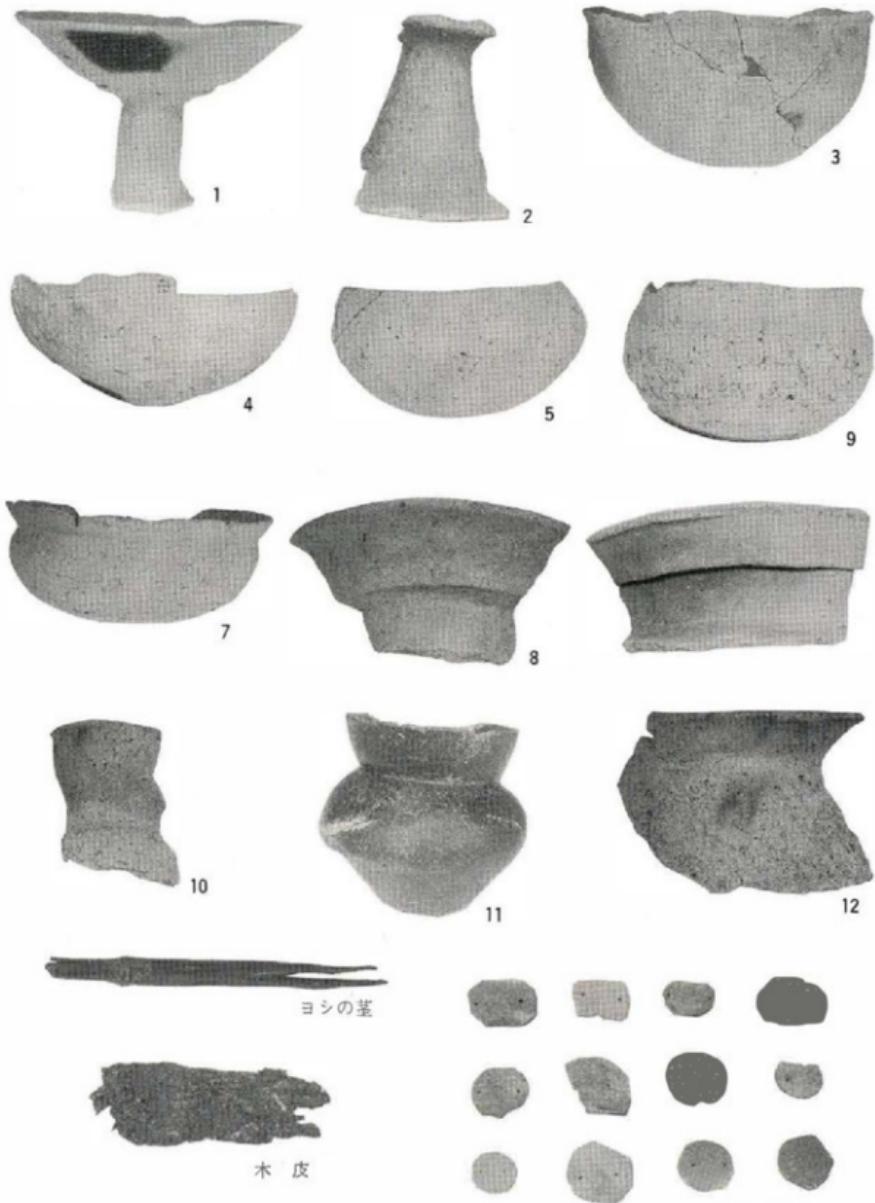


SK432土塙(南より)

写真図版 8



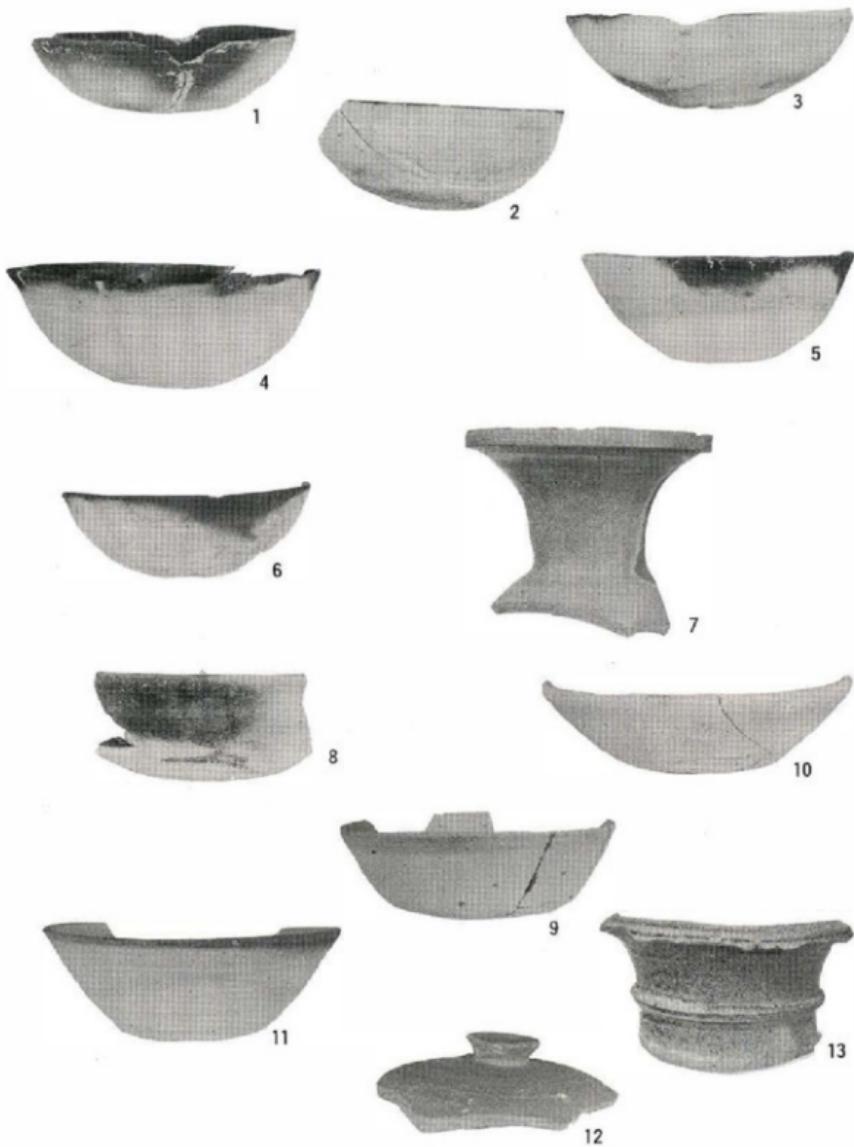
SD467溝跡(南より)



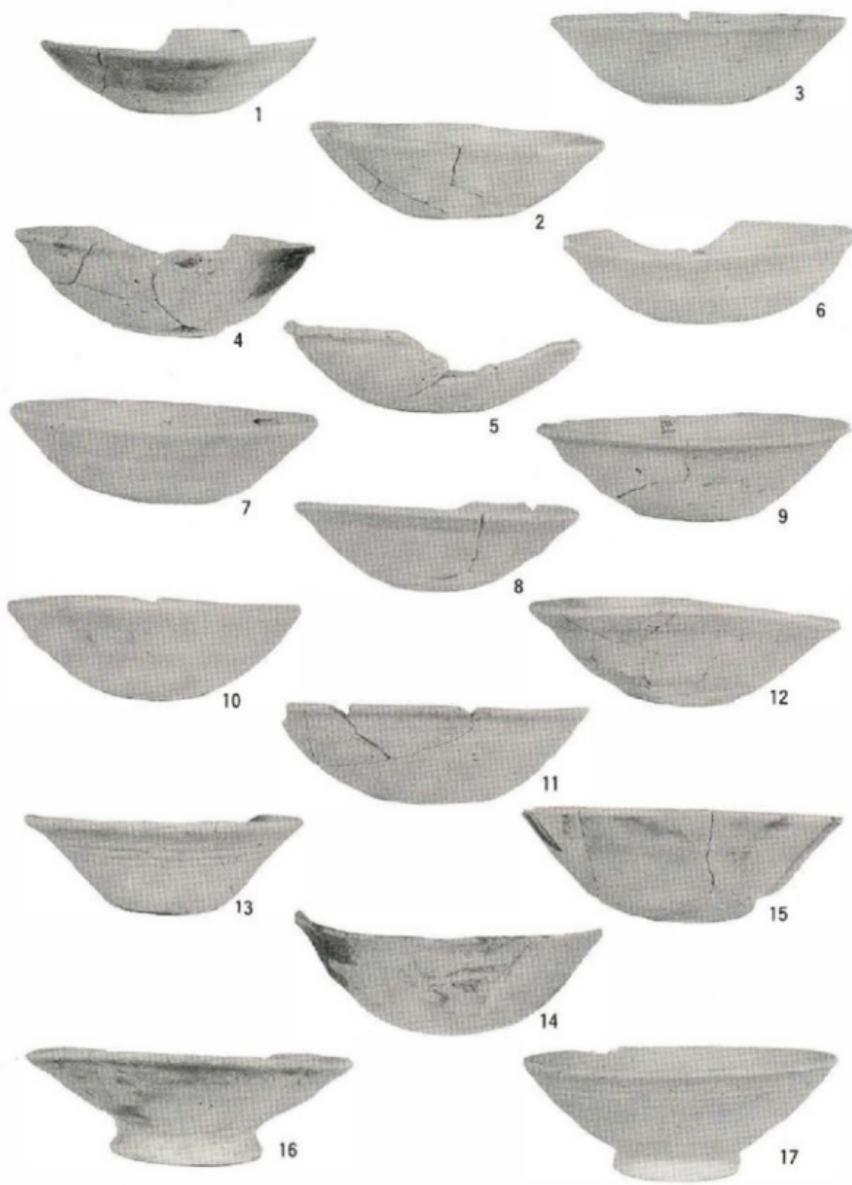
写真図版 9

古墳時代の遺物(土師器・石製模造品等)

石器模造品

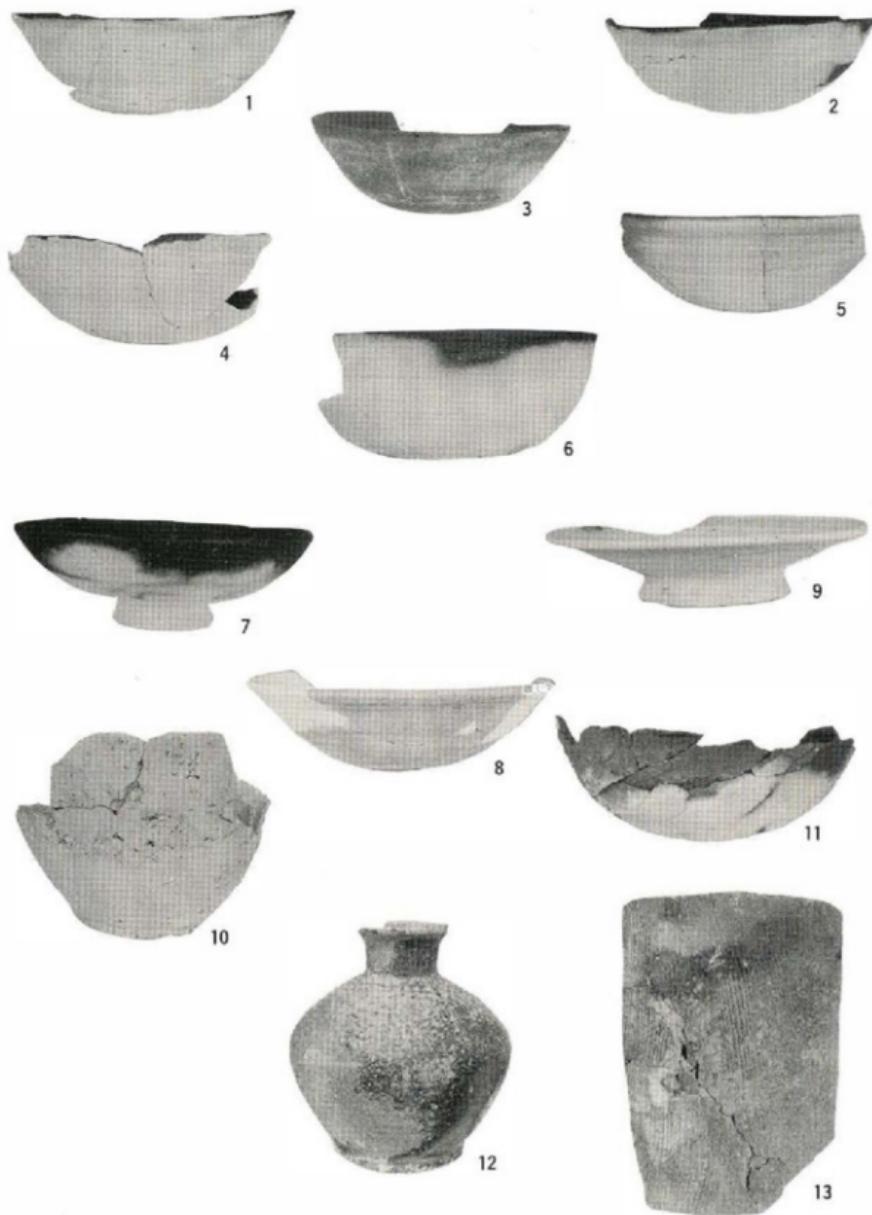


写真図版10
道路側溝跡出土遺物(土師器・須恵器)



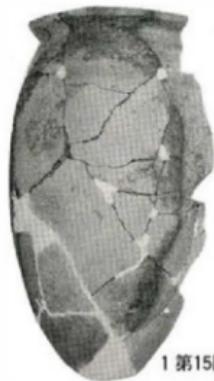
写真図版11

道路側溝跡出土遺物(赤焼き土器)



写真図版12

SE392~395井戸跡出土遺物



1 第15図 9



2 第15図 10



3 第9図 5



4 第15図 8



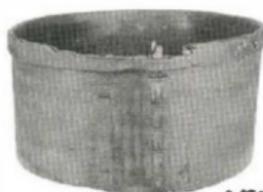
5 第15図 7



6 第33図 16



7 第22図 2



9 第22図 3



8 第22図 1



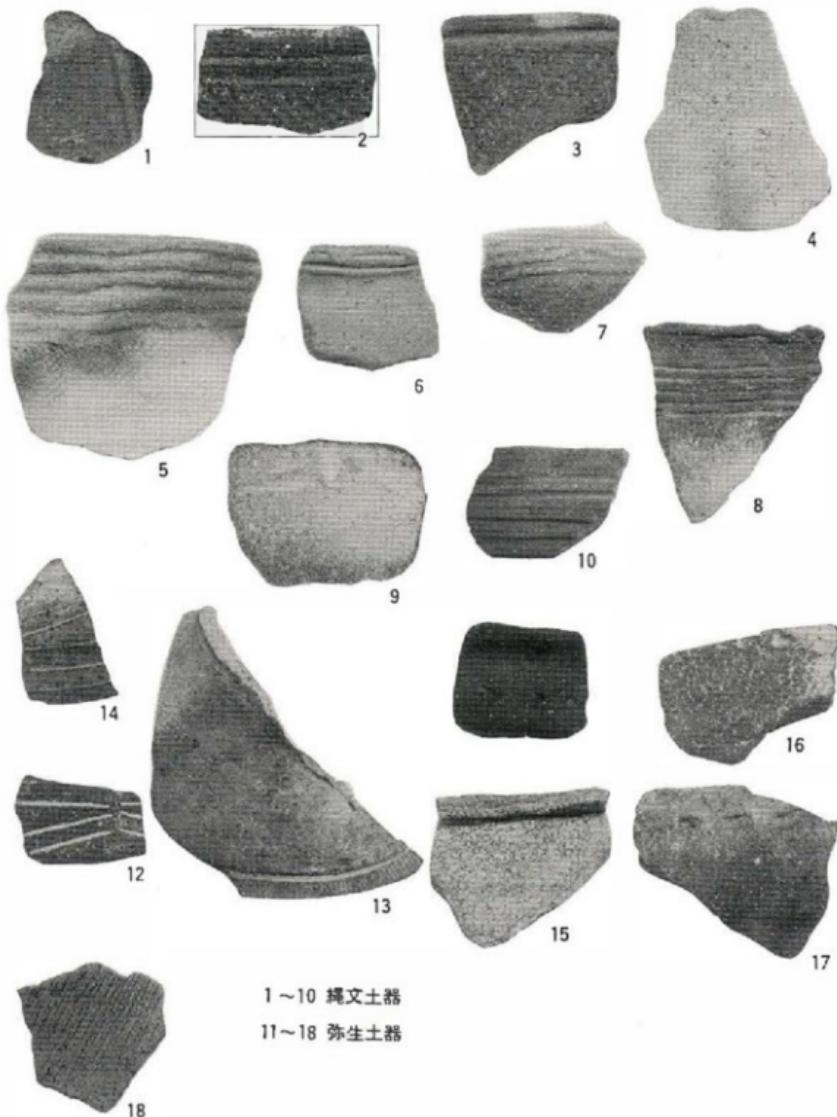
10 第22図 4



11 第4図 1

写真図版13

木製品他



1~10 纹文土器

11~18 弥生土器



1 第22図1



2 第22図3



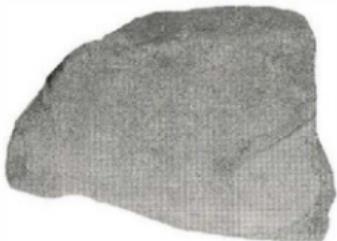
3 第22図5



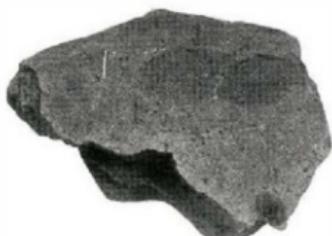
4 第22図8



5 第22図6



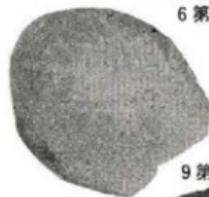
6 第22図7



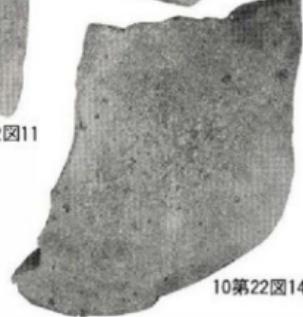
7 第22図10



8 第22図11



9 第22図3



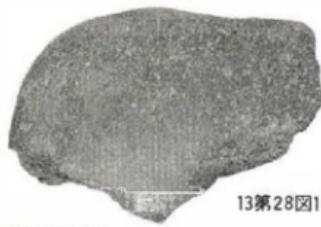
10 第22図14



11 第28図15



12 第22図13



13 第28図16

写真図版15

砥石・使用痕・加工痕のある砾

多賀城市文化財調査報告書第22集

山 王 遺 跡

- 第8次発掘調査報告書 -

平成2年3月31日 発行

編集発行 多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電話 (022) 368-0134

印刷 渡辺印刷
塩釜市旭町17番13号
電話 (022) 364-3161
